

# 円座近世墓群発掘調査報告

## ～伊勢市円座町～

2014（平成26）年2月

三重県埋蔵文化財センター



## 例　　言

- 1 本書は、三重県伊勢市円座町に所在する円座近世墓群の発掘調査報告書である。
- 2 この調査は、主要地方道伊勢南島線（円座）地方道路特定事業に伴い、平成23・24年度に記録保存を実施したものである。
- 3 発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会  
調査担当　三重県埋蔵文化財センター  
平成23年度（第1次調査）　調査研究1課　技師　萩原義彦・高松雅文  
平成24年度（第2次調査）　調査研究1課　主幹　伊藤裕偉　技師　相場さやか  
平成25年度（報告書作成）　調査研究1課　主幹　伊藤裕偉
- 4 調査にかかる諸費用は、執行委任を受けて三重県県土整備部が負担した。
- 5 本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 6 本書の作成にあたっては、下記の方々から有益なる助言を頂いた。記して謝意を表するものである。

小林秀（三重県生活文化部）　狹川真一（（財）元興寺文化財研究所）  
藤澤良祐（愛知学院大学）　堀内秀樹（東京大学）
- 7 当報告書の作成業務は当センター調査研究1課が行った。報告文の作成と編集は伊藤が担当した。

## 凡　　例

### <地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、2006三重県共有デジタル地図（平成23年測図）、これらの地図は、全て世界測地系（測地成果2000）に対応している。
- 2 2006三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（承認番号：三総合地第93号）。
- 3 調査区は、世界測地系に基づく国土座標第VI系での位置を示している。挿図の方針は座標北である。なお、磁針方位は西偏7°00'（平成10年）である。

### <遺構類>

- 4 現地土壤の色調と土質は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967年初版、2003年第23版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。
- 5 当報告書での遺構は、全体で通番をしている。

6 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の暗記号を付けている。

S D ……溝 SK ……土坑（墓坑想定遺構を含む） S X ……墓坑 SZ ……落ち込み・風倒木

7 遺構は、調査時に付加した遺構番号を踏襲している。

### <遺物類>

8 当報告での遺物実測図類は、銭貨拓本は実寸大、銭貨を除く金属製品類は1/2で示した。土器類は、一部を実物の1/2で表した以外の大部分を1/3で示した。

9 実測図のうち、上下の外郭線（口縁部・底部など）に切り目を入れているものは、残存が少ない（1/12以下）が、既存事例に基づきおおよその大きさを推測して示したものである。

10 当報告書での用語は、「わん」は「碗」に統一している。

11 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号……挿図掲載番号である。

実測番号……実測段階の登録番号である。

様・質……「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。

器種など……遺物の器種を示す。

遺構・層名……遺物の出土した遺構や層名を記した。

法量(cm)……遺物の法量を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(体)は体部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整・技法の特徴……主な特徴を外面（外；）・内面（内；）で示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。

胎土……小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調……その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に据る。

残存度……指示部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。

特記事項……遺物の特徴となるその他の事項を記した。

### <写真図版>

12 挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。

13 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

# 本文目次

I 調査の契機・経過と行政的諸手続	(1)
1 調査の契機と協議経過	
a 総説	
b 協議の経過	
2 発掘調査の経過と法的措置	
a 調査の状況	
b 発掘調査の普及・公開	
c 文化財保護法等にかかる諸通知	
3 発掘調査と記録の方法	
a 掘削の方法	
b 地区設定	
c 遺構番号	
d 出土遺物の回収	
e 遺構図面	
f 遺構写真	
4 整理作業とその方法	
a 遺物類の整理	
b 国版作成と遺物写真撮影	
c 記録類	
5 出土遺物の保存処理	
II 遺跡と周辺の諸環境	(5)
1 位置と地形	
2 歴史的環境	
a 古代以前の円座周辺地域	
b 中世の円座周辺地域	
c 中近世の墓地と近世集落	
d 近世の円座周辺地域	
III 調査の成果～層位と遺構～	(9)
1 調査区の地形と層位	
a 調査地の地形	
b 調査区の層位	
2 検出した遺構	
a 中世の遺構	
b 近世の遺構	
c その他の遺構	
IV 調査の成果～出土遺物～	(22)
1 概要	
2 中世以前の遺物	
3 近世墓および近世の遺物	
VII 調査のまとめと検討	(32)
1 近世以前の円座地区	
a 平安時代の円座地区	
b 中世の円座地区	
2 円座近世墓群の出土遺物	
a 出土土器類の変遷	
b 出土金属製品類から見た所属時期	
c 所属時期	
3 円座近世墓群の構成	
a 墓坑の形態	
b 時間的変遷	
c 埋葬施設の性格	
d 副葬品の出土状況	
e 墓坑の深度と削平状況	
f 特徴的な出土遺物	
4 円座近世墓群のその後	
a 明治絵図から	
b 無縁塔の状況から	

## 挿 図 一 覧

- |                         |                    |
|-------------------------|--------------------|
| 第1図 道路改良工事計画と調査区の位置     | 第10図 近世墓個別遺構実測図(2) |
| 第2図 円座近世墓群の周辺遺跡分布図      | 第11図 出土遺物実測図(1)    |
| 第3図 円座地区の主要施設と円座近世墓群の位置 | 第12図 出土遺物実測図(2)    |
| 第4図 調査区平面図              | 第13図 出土遺物実測図(3)    |
| 第5図 調査区詳細平面図(1)         | 第14図 近世土師器皿類他の変遷   |
| 第6図 調査区詳細平面図(2)         | 第15図 墓坑の形態分類       |
| 第7図 調査区詳細平面図(3)         | 第16図 近世墓のグループ      |
| 第8図 調査区土層図              | 第17図 墓坑の変遷         |
| 第9図 近世墓個別遺構実測図(1)       |                    |

## 表 一 覧

- |                           |                           |
|---------------------------|---------------------------|
| 第1表 遺構一覧(1)（近世墓以外）        | 第4表 円座近世墓群出土遺物（土器類）観察表(2) |
| 第2表 遺構一覧(2)（近世墓）          | 第5表 円座近世墓群出土金属製品観察表       |
| 第3表 円座近世墓群出土遺物（土器類）観察表(1) |                           |

## 挿 入 写 真 一 覧

- |                                  |                     |
|----------------------------------|---------------------|
| 写真1 第1次調査                        | 写真5 「伊勢国度会郡圓座村絵図」部分 |
| 写真2 第2次調査                        | 写真6 円座地区墓地無縁塔塚A     |
| 写真3 おもろいもん出ましたんやわ@三重2012での<br>展示 | 写真7 円座地区墓地無縁塔塚B     |
| 写真4 円座の鞆鼓踊                       |                     |

## 写 真 図 版 一 覧

- |               |                |
|---------------|----------------|
| 写真図版1 調査区全景   | 写真図版8 個別遺構（6）  |
| 写真図版2 調査区近景   | 写真図版9 出土遺物（1）  |
| 写真図版3 個別遺構（1） | 写真図版10 出土遺物（2） |
| 写真図版4 個別遺構（2） | 写真図版11 出土遺物（3） |
| 写真図版5 個別遺構（3） | 写真図版12 出土遺物（4） |
| 写真図版6 個別遺構（4） | 写真図版13 出土遺物（5） |
| 写真図版7 個別遺構（5） | 写真図版14 出土遺物（6） |

# I 調査の契機・経過と行政的諸手続

## 1 調査の契機と協議経過

### a 総説

ここで報告する円座近世墓群は、主要地方道伊勢南島線（円座）地方道路特定事業に伴い、平成23・24年度に発掘調査（記録保存）を実施したものである。事業主体は三重県県土整備部（道路建設課）、実施機関は伊勢建設事務所で、調査を三重県埋蔵文化財センター（以下、当センター）が実施した。

### b 協議の経過

円座近世墓群は、平成23年度末に実施した当事業にかかる工事立会で新たに発見された遺跡である。伊勢市円座町地内では、当該事業域に関係する埋蔵文化財として、中道遺跡（遺跡番号203-a129）が協議対象であった。中道遺跡の範囲確認調査は平成23年12月8日に実施した。その結果、事業地内の中道遺跡範囲では、遺構・遺物が確認されなかつたものの、同時に実施した字壱通地内の立会で遺跡の可能性がある地点を確認した。

平成23年度中に、字壱通地内において一部工事が着工されることとなつた。このため、当センターと伊勢建設事務所で協議を行い、当該地の工事立会を改めて実施したところ、近世墓群の存在が明らかとなつた。このため、当センターと伊勢建設事務所は再度協議を行い、該当箇所について急遽記録保存を

実施することとし、それと並行して、当該地の遺跡発見にかかる事務手続きを行い、当地を「円座近世墓群」として新たに認識することとした（第1次調査）。

円座近世墓群の含まれる事業地部分は、平成24年度に工事が実施されることとなつてゐた。それを踏まえ、当センターと伊勢建設事務所は再度協議を実施し、残りの部分を平成24年度に発掘調査を実施することとなった（第2次調査）。発掘調査費用については、県土整備部から県教育委員会に対し、当該調査にかかる予算の執行委任を行つた。

## 2 発掘調査の経過と法的措置

### a 調査の状況

工事立会として実施した円座近世墓群第1次調査は、平成24年2月20・21日の2日間に実施した。調査面積は36m<sup>2</sup>であった。

円座近世墓群第2次の発掘調査は、調査面積が少ないことから、工事と併行して実施する「工事立会」形式（現物供与）とした。ただし、遺構掘削や記録作業は通常の発掘調査と変わらないものとすることで伊勢建設事務所と合意した。

発掘調査にあたっては、道路改良工事受注業者である株式会社森組が土工部門の管理を行つた。

発掘調査は平成24年8月6日から同9日の4日間



写真1 第1次調査



写真2 第2次調査

で実施した。最終調査面積は126m<sup>2</sup>である。

#### 【調査経過】

##### ・第1次調査

2月20日 工事立会開始。工事範囲内に、土坑を数基確認。近世墓と判明。遺構掘削を併せて行う。

2月21日 遺構掘削の終了。平面図作成。

##### ・第2次調査

8月6日 調査開始。南端部から重機による表土掘削。黒ボク層が厚い。南端から20m地点（n20）で溝。中世土器片含む。n30付近で近世墓群を検出。遺構掘削とともに、写真撮影と個別遺構図作成を行って進める。

8月7日 遺構掘削を継続。S X27～37にかけて、掘削・個別遺構図作成・写真撮影などを順次進める。

8月8日 全体平面図作成用の配点。土層図および個別遺構図・全体平面図の作成。全景写真の撮影。

8月9日 补足調査。伊勢建設事務所に現地引き渡し。現地調査終了。

#### b 発掘調査の普及・公開

発掘調査が工事立会形式であったため、発掘調査後の現地説明会は開催できなかった。調査成果の一部は、県公共事業にかかる発掘調査の成果報告会である「おもろいもん出ましたんやわ@三重2011」（平成24年3月24日に開催）、および、「おもろいもん出ましたんやわ@三重2012」（平成25年3月9日に開催）で、当遺跡出土資料の展示とパワーポイ



写真3 おもろいもん出ましたんやわ  
@三重2012での展示

ントによる説明を行った。

#### c 文化財保護法等にかかる諸通知

発掘調査にかかる文化財保護法（以下、「法」）の諸通知は、以下により行われている。

##### <第1次調査>

##### ・遺跡発見通知（県教育長あてセンター所長通知）

平成24年2月27日付、教理第387号

##### ・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長あて県知事通知）＊中道遺跡を含む

平成24年7月19日付、伊建第668号

##### ・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知（伊勢警察署長あて県教育長通知）

平成24年3月19日付、教委第12-4426号

##### <第2次調査>

##### ・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長あて県知事通知）

平成24年7月19日付、伊建第668号

##### ・発掘調査通知（県教育長あてセンター所長通知）

平成24年8月6日付、教理第168号

##### ・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知（伊勢警察署長あて県教育長通知）

平成25年1月9日付、教委第12-4418号

### 3 発掘調査と記録の方法

#### a 掘削の方法

円座近世墓群では、第1次調査・第2次調査ともに、表土・床土層（約25cm）は重機で除去し、その後に遺構検出のための削り込みと遺構掘削を人力で行った。包含層に相当する層は無い。

#### b 地区設定

事業地内の小地区割りは、調査区が狭かったために行わなかった。

#### c 遺構番号

遺構は、調査区内を通じて通番とした。調査段階では出土遺物の認められた遺構を墓と考えて「SX」とした。整理段階で、出土遺物は無いが形状から墓坑と考えられるものに「SK」を付加した。なお、SKには通常の土坑に相当するものもある。

#### d 出土遺物の回収

出土遺物は、出土遺構と出土年月日を記載した専用のラベルを現地で付与した。また、小地区割りを

行っていないため、遺構に伴わない遺物は出土地点がわかる表記を与えた。遺物類は当センターへ搬送し、洗浄などの作業を行った。

#### e 遺構図面

遺構検出段階で、略測図（遺構カード）を作成した。遺構が少なかったため、遺構カードはメモ的なものである。

発掘調査終了後に、調査区全体の実測図を作成した。調査区の平面図は1/20で作成した。調査区の土層図は、第1次調査・第2次調査とともに、県道側の北西壁面を採録した。墓坑は1/10スケールの平面・断面図を作成した。

#### f 遺構写真

遺構関連の写真に関しては、全て35mm版にて撮影した。それぞれのフィルムは、白黒とスライドを同時に撮影した。また、デジタル画像も適宜撮影した。

## 4 整理作業とその方法

#### a 遺物類の整理

発掘調査現地から当センターへ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

出土遺物は、発掘調査担当者が報告書掲載用遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測図を作成した。未掲載遺物は袋詰めにし、整理箱に収納した後に、専用収蔵庫へと搬入した。報告書掲載遺物については、それぞれ1枚づつラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。

出土遺物は、整理の結果をもとに、報告書掲載分および参考資料としての保管分（A遺物）と、報告書未掲載分（B遺物）とに区別して保管している。

#### b 図版作成と遺物写真撮影

実測図等が完成した遺物類は、報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

報告書用に作成した版下類やトレース図類については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、報告書用の写真を6×7版（プロニー）で撮影した。遺物写真的撮影は、報告書掲載資料全てではなく、掲載資料のうちの主立ったものとした。

#### c 記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで保管している。

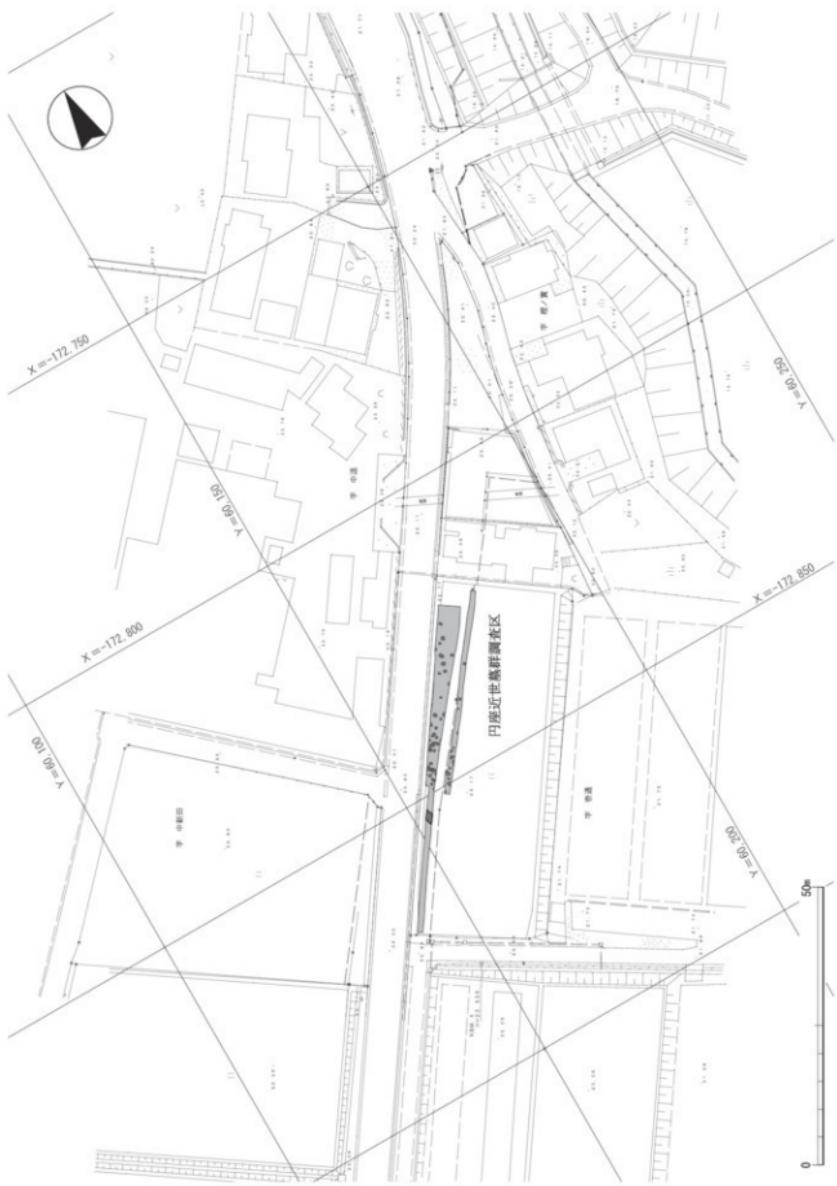
## 5 出土遺物の保存処理

常態での保存が困難な金属製品類が出土したため、保存処理を実施した。処理した金属製品は鉄製品および銅製品で、合計10点である。

保存処理の方法は、X線撮影やクリーニングなどの基礎作業の後、アクリル樹脂20%ナフサ溶液を含浸させる方法とした。

保存処理は平成24・25年度の委託業務として実施した。平成24年度分（第1次調査）、平成25年度分（第2次調査）のいずれも、オープンカウンタ方式による公開見積により、㈱吉田生物研究所が落札して受注、処理を行った。

（伊藤）



第1図 道路改良工事計画と調査区の位置

## II 遺跡と周辺の諸環境

### 1 位置と地形

円座近世墓群は、三重県伊勢市円座町字恋通に所在する。当地は宮川南岸の台地上で標高約24m、集落の北で横輪川が宮川と合流し、西側は標高95m前後の丘陵、南は比高差15mほどの谷が入っている。集落と西部丘陵との間にも狭い谷が入っている。つまり円座地区は、宮川をはじめとしたこれらの谷状地形で囲まれた環境となっている。

現在の円座地区集落は、この台地のなかでも宮川寄りのやや高所に位置する。現況集落の位置は、古来最も居住に適した場所であったと考えられるので、円座地内における歴代の居住地はこの位置に求められるものと考えられる。

### 2 歴史的環境

円座地域を中心とした歴史的諸環境について、既存の調査や資料をもとに概観する。

#### a 古代以前の円座周辺地域

宮川流域および円座地区東を流れる横輪川の流域では、旧石器時代の遺跡が確認できる。佐八藤波遺跡・元新田遺跡・大津野A遺跡からはナイフ型石器が見つかっている。大津野A遺跡は円座地区からもほど近い位置にあるため、円座地区にも旧石器時代の遺跡が確認される可能性があろう。

縄文時代では、佐八藤波遺跡が著名である。佐八藤波遺跡は円座地区よりも下流の宮川流域にある。ここからは中期・後期・晩期の縄文土器・石器がまとまって出土しており、当地を代表する縄文遺跡といえる。また、この他にも、中新田遺跡や、円座地区にある塚の上遺跡からも縄文時代の遺物が確認されている。縄文時代の遺跡は総じて濃密に見られると言えるだろう。

弥生時代では、中ノ垣内遺跡で中期前半頃の堅穴住居、元新田遺跡から弥生時代中期頃の遺物が見られた。宮川沿岸部に当該期の遺跡は少ないが、平地の広がる下流部北岸では小社遺跡・中楽山遺跡など

大規模な遺跡が展開している。

古墳時代では、落合古墳群（伊勢市津村町）が著名である。この古墳群は古墳時代前期末から後期前半にかけての群集墳で、5世紀代の3号墳からは初期須恵器のほか、蛇行剣・麻手刀子などが出土している。中期以前の大型古墳が見られない地域における小規模古墳のあり方を典型的に示すものである。古墳時代後期には、藤波古墳群のように低台地上に形成される群集墳のほか、丘陵部にもいくつかの古墳が確認できる。玉田山古墳（佐八町）や宮川北岸の丸山古墳（度会町大野木）は横穴式石室墳と見られるが、木棺直葬墳が多いと考えられるのも当地の特徴であろう。

奈良・平安時代の遺跡も確認事例は少ない。中ノ垣内遺跡では奈良時代の堅穴住居や平安時代の掘立柱建物が確認されている。

#### b 中世の円座周辺地域

平安時代後末期から戦国期にかけての「中世」と呼ばれる時期は、総じて神宮の影響が強く見られる。とくに宮川中流域には神宮祭主の館が設けられており、神宮にとっての要地であったと見られる。

平安時代末から鎌倉時代前期にかけての遺跡は確認事例が多い。佐八藤波遺跡・中ノ垣内遺跡・中新田遺跡・寺原B遺跡・下沖遺跡など、掘立柱建物を中心とした集落跡が多く確認されている。当該期には宮川を挟んで対岸の岩出（度会郡玉城町）や、佐八地区（伊勢市）に神宮祭主館があった。岩出遺跡群や佐八藤波遺跡は、神宮祭主館に関連した中世集落遺跡と考えられる。

鎌倉時代後期には、宮川北岸に蓮花寺が建立される（度会郡度会町棚橋）。蓮花寺は神宮との関係が強く、法楽寺と改名された南北朝時代には北朝方の重要な拠点ともなった。

15世紀代を中心とした室町時代の動向は、今ひとつわからないことが多い。集落遺跡にも明確なもののが少ないが、岩出遺跡群では引き続き濃密な集落展開が認められる。室町期から戦国期にかけての宮川

中流域は、神宮だけでなく、南北朝期から勢力を増した伊勢国司北畠氏の影響も強く及んでいたものと考えられる。

戦国時代末期の16世紀後半になると、岩出地区に岩出城跡が築城される。かつて神宮祭主館が設けられていた地と重なるように造成されたこの城は、これまで大規模な城館が見られなかった当地に新たな展開が訪れたことを示している。

#### c 中近世の墓地と近世集落

戦国末期の16世紀中頃になると、現代につながる集落（村落）が各地に成立するとみられる。この時期の集落は、遺跡としては確認されにくいものの、各地に造成された墓地を見ると、16世紀代と考えられる五輪塔（一石五輪塔）をはじめとした石塔類が多く確認できることから、その造営主体として近世村落が想定されるのである。これらの石塔は、現在の大字単位の集落（村落）へとつながる墓地に多用されている。

円座地区では、現況集落の南部に墓地があり、2箇所の無縁塔群がある。無縁塔群内には一石五輪塔のほか、背光五輪塔（板彫形五輪塔）や南伊勢系板彫形石塔などが含まれており、刻銘には慶長年間のものが見られる。第VI章で改めて見るが、円座地区には2箇所の近世墓地があった。石塔の状況は、これらの墓地が16世紀頃に成立していることを物語っている。

なお、円座集落の中心にある正覚寺の前には庚申堂があり、そこには天正14(1586)年銘の庚申供養塔がある。三重県下でも古い事例の庚申塔である。

#### c 近世の円座周辺地域

17世紀代から19世紀中葉までの江戸時代（近世）は、江戸幕府支配下で郷村制が確立していた時期である。江戸時代には、宮川下流域には広く神宮領が展開していたが、宮川中上流域は紀州藩領が多く見られた。

円座村も紀州藩領で、なかでも城代の置かれた田丸城を中心とした田丸領に組み入れられている。17世紀前半頃に成立した、いわゆる「慶安郷帳」によれば、円座村の村高は180石5斗8升であった。

円座の村高は、近隣の上野村（500石余）・津村（235石余）・佐八村（376石余）などと比べて少ない。村の面積は、円座村と津村とではあまり変わらないが、石高に差異が生じているのは、農業用水が引きにくく、円座村の土地柄に起因している。元禄9(1696)年には当時の大庄屋である米山宗隆の先導により農業用導水路が設置され、新田が広がっている（米山新田）。この水路は江戸後期にも改修されたが、その時の苦闘が語り伝えられている。現在この江戸期新田の地には明治18年に立てられた顕彰碑があり、新田開発に奔走した当時の苦労を静かに伝えている（市指定史跡）。

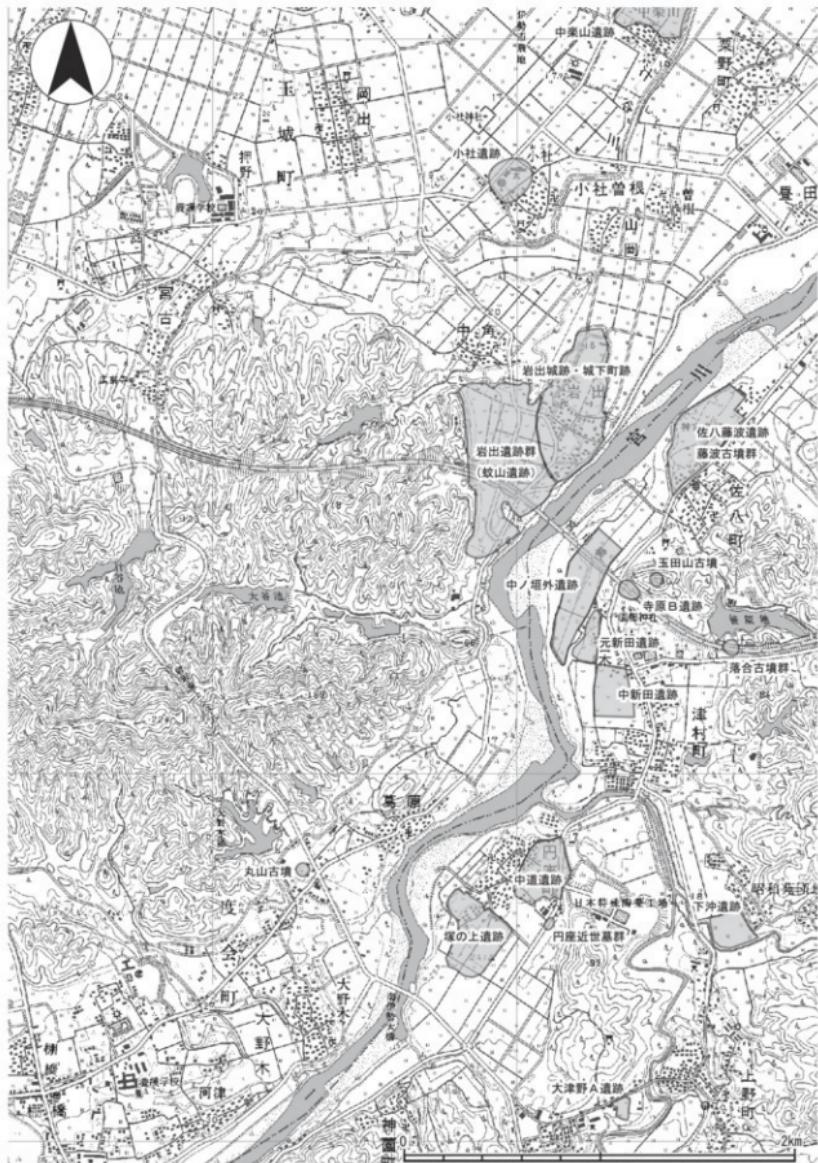


写真4 円座の羯鼓踊（2013.8.15）

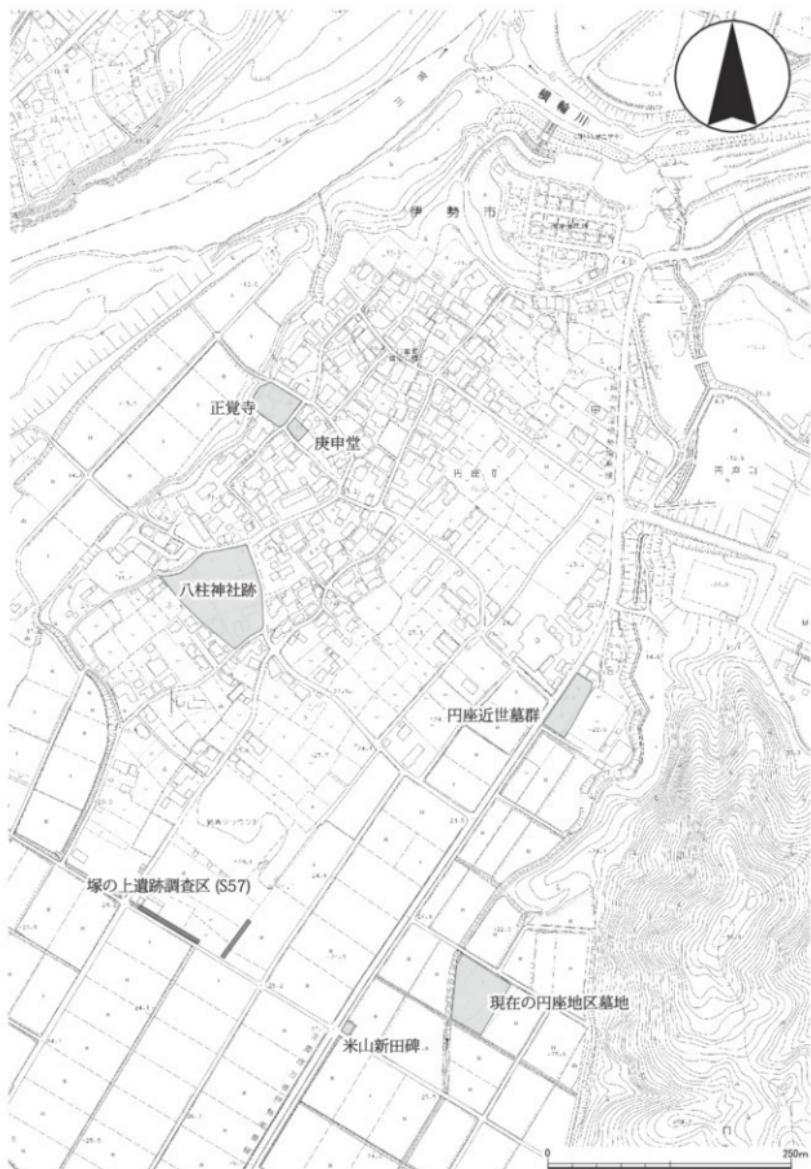
この他に、円座地区には羯鼓踊が伝承されている（県指定文化財、写真4）。8月15日の夕刻から正覚寺境内で催される盆行事で、太鼓を手にシャグマを被って火の周りを回る幻想的なものである。羯鼓踊は佐八地区にも伝承されており、かつては近隣一体の村落で執り行われていたと考えられる。当地近隣村落の特徴といえる。

#### 【参考文献】

- ・平松令三監修『三重県の地名』日本歴史地名体系第24巻（平凡社、1983年）
- ・伊勢市民俗調査会編『伊勢市の民俗』（1988年）
- ・伊勢市教育委員会『伊勢市の文化財』（1981年）
- ・伊勢市編『伊勢市史』第2巻中世編（2012年）、第3巻近世編（2013年）、第6巻考古編（2011年）
- ・『玉城町史』上巻（玉城町、1995年）
- ・『度会町史』（度会町、1981年）
- ・三重県埋蔵文化財センター『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』（1993年）
- ・三重県教育委員会『三重県石造物調査報告』I（2009年）、II（2013年）



第2図 巴塵近世墓群の周辺遺跡分布図（国土地理院 1:25,000「伊勢」）1:25,000



第3図 円座地区の主要施設と円座近世墓群の位置 (1 : 5,000)

### III 調査の成果～層位と遺構～

#### 1 調査区の地形と層位

##### a 調査地の地形

調査地は円座集落の南東端部にあたる。円座集落のある微高地は、集落の東部丘陵に向かってやや下降している。道路は、その下降した端部にあたる。標高は約23mである。

##### b 調査区の層位

調査区の層位を、第2次調査区北壁土層で観察する（第8図）。基本層序は、①層：表土（土層図第1～3層）、②層：黒褐色系土（土層図第4～8層）、③層：黒色土（土層図第9・10層）、④層：黄褐色系粘土層（土層図第11層）である。④層が段丘形成層すなわち遺構基盤層にあたる。③層はいわゆる「黒ボク」で、南部ほど均質な粘土質、北部ではやや小礫を含む状態となり、いずれも2次堆積土と考えられる。この層も、場所によっては遺構基盤層となっている。

調査区の北端と南端とでは、北端の方が20cmほど基盤層が高い。中世の遺構が確認できた南部では、黒色土層が堆積しており、遺構は黒色土上面で確認できる。それに対し、近世墓群のある調査区北部では黒色土の自然堆積層は認められなかった。

中世および近世の遺構埋土となるのが黒褐色系土（③層）である。近世墓は調査区北部に集中し、ここには黒色土の堆積は見られない。しかし、近世墓の埋土には黒色土由来するブロック土が認められるため、近世墓の形成段階には、調査区北部付近にも黒色土が覆っていたものと考えられる。

#### 2 検出した遺構

確認した遺構には、近世墓・溝・土坑などがある。出土遺物には平安時代・鎌倉・室町時代、近世のものがあるが、平安時代の遺構は確認できなかった。

以下、個々の遺構を見ていく。基礎的なデータは遺構一覧表（第1・2表）にまとめたので、併せて参照されたい。

##### a 中世の遺構

中世の遺構には、土坑と溝がある。

**土坑SK6** 第2次調査区南部で確認した遺構である。直径約1.2m、検出面からの深さ約15cmほどの円形の土坑で、全体の3/5が調査区外。土坑中央から20cm程度の川原石が出土している。時期を示す遺物は出土しなかったが、埋土の状況が後述のSD7と類似していたため、中世の遺構と考えておく。

**溝SD7** 第2次調査区南部で検出した遺構である。幅約1.6m、深さ40cmほどの、断面U字形の溝である。この溝を境に、基盤層面が北部は高く、南部は低くなるので、土地区分に関係した溝と考えられる。埋土内からは南伊勢中世Ⅲa期の土師器鍋のほか、陶器碗（山茶碗）などが出土している。出土遺物から、鎌倉時代末期から南北朝期にかけての遺構と考えられる。

##### b 近世の遺構

近世の遺構には、近世墓がある。近世墓は調査区北部に集中している。

なお、遺構の形状が近世墓と同様だが、出土遺物が無いために墓と断定できないものもある。これらは土坑（SK）として報告するが、近世墓の可能性が高いものと考えられる。

**近世墓SX1** 第1次調査区南部で確認した遺構である。平面形は長方形で、長辺64cm、短辺47cm。遺構検出面からの深さは21cmである。

埋土内から人の歯と鉄釘が出土している。鉄釘には木質が接着しているので、小規模な小規模な方形木製容器（棺。以下「方形棺」とする）に納骨され、埋納されたと考えられる。また、陶器碗1点、土師器小皿2点が出土している。副葬品と考えられるが、記録作成しないまま取り上げたため、出土位置や状況は不明である。

**近世墓SX2** 第1次調査区南部で確認した遺構である。平面形は長方形で、長辺73cm、短辺62cm。遺構検出面からの深さは18cmである。

埋土内から人の歯と鉄釘が出土している。鉄釘に

は木質が接着しているので、小規模な方形棺に納骨され、埋納されたと考えられる。また、土師器小皿2点が出土しており、副葬品と考えられるが、これも記録作成せずに取り上げたため、出土位置や状況は不明である。

**近世墓S X 3**（第9図） 第1次調査区南部で確認した遺構である。平面円形で、直径36cmほどのピット状を呈する。遺構検出面からの深さは11cm程度で浅い。

墓坑の底面に鎌が1点副葬されていた。鎌の上面には木質の圧痕があり、筒形の有機質容器（桶状の木製品と推定する。以下「筒形棺」）に納められていたと考えられる。鎌以外の副葬品は無いが、確認遺構が浅いため、上部は削平で滅失していると考えられる。

**近世墓S X 4**（第9図） 第1次調査区南部で確認した遺構である。平面形は長方形で、長辺78cm、短辺48cm。遺構検出面からの深さは23cmである。

墓坑の北寄りに土師器皿2点が副葬されていた。土師器皿は遺構底面に達せず、中央に向かって傾斜して出土しているため、方形棺の上に置かれていた可能性が高い。

**近世墓S X 5** 第1次調査区南部で確認した遺構である。平面円形で、直径約42cm。遺構検出面からの深さは24cmである。

埋土内からは人骨や副葬品は見られなかったが、形態から見て近世墓と判断できる。

**近世墓S X 11**（第9図） 第2次調査区中央部で確認した遺構である。平面円形で直径約51cm、遺構の半分は調査区外である。遺構検出面からの深さは29cmである。

埋土内から土師器皿2点と陶器碗片1点が出土している。いずれの遺物も遺構底面に達していないため、筒形棺の上に置かれていた可能性が高い。陶器碗は、破片として副葬されたのではなく、後世の搅乱によってその一部しか残らなかったものと考えられる。

**近世墓S X 12**（第9図） 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X 11の北にある。平面円形で、直径50cmほどのピット状を呈する。遺構検出面からの深さは21cm程度である。

墓坑内の西寄りに、鎌1点・陶器碗1点・土師器

小皿4点が副葬されていた。いずれも墓坑底面よりは10cmほど上で確認されたため、筒形棺の上に置かれていたと考えられる。また、鎌は人為的に破碎されて4片となっていた。何らかの葬送行為として裁断されたと考えられる。

**近世墓S X 13**（第9図） 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X 12の東にある。平面円形で、直径50cmほどのピット状を呈する。遺構検出面からの深さは16cm程度である。

埋土内から、包丁（？）1点・土師器小皿2点・六道銭が出土した。副葬品と考えられる六道銭は墓坑底面近くで、その他の副葬品も墓坑から数cm程度上で確認された。六道銭は6枚が重なってひとまとまりになっていた。このため、これらの副葬品は筒形棺の内部に遺体と共に納められていた可能性が高い。

なお、包丁はS X 12の鎌と同様、人為的に裁断されていたが、1片のみが出土し、他の破片は無かつた。遺構の遺存が悪いため、残らなかった可能性がある。とすれば、包丁の一部を棺内に、一部を棺外に、それぞれ置いていた可能性も考えられる。

**近世墓S X 14** 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X 13の北にある。平面円形で、直径約22cm。遺構検出面からの深さは10cmである。遺構が浅いこともあってか、埋土内からは人骨や副葬品は見られなかったが、形態から見て近世墓と判断できる。

**近世墓S X 15** 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X 13の北にある。平面楕円形で、長軸58cm、短軸48cm。遺構検出面からの深さは56cmで、この遺跡のなかでは深いものである。

埋土内からは鉄製の小型利器と六道銭が出土している。利器は鉄か何かの先端と考えられる。いずれも副葬品と考えられるが、記録作成しないまま取り上げたため、出土位置や状況は不明である。ただ、六道銭は墓坑の掘削がかなり進んだ段階での出土であったため、出土位置は墓坑底面に近かったと思われる。

**近世墓S X 16**（第9図） 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X 15の北にある。遺構の南部は土坑S K 50によって破壊されている。平面楕円形で、長軸75cm以上（調査区外に伸びる）、短軸55cm。遺構検出面からの深さは11cm程度と浅い。

埋土内から、鉄釘のほか、土師器小皿4点、陶器碗1点が出土した。副葬品と考えられる。いずれも墓坑底面近くで出土したため、棺内に埋納されていた可能性が高い。

**近世墓S X17** 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X15の東にあたる。平面略円形で、長軸62cm、短軸52cm。遺構検出面からの深さは20cmである。

埋土内からは陶器碗1点、土師器小皿1点が出土している。副葬品と考えられる。記録作成しないまま取り上げたため、出土位置や状況は不明だが、遺構内の比較的高い位置からの出土であった。

**近世墓S X18** 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X17と重複し、それよりも新しい。平面略円形で、直径50cm程度。遺構検出面からの深さは11cm程度である。

埋土内からは土師器小皿1点が出土している。副葬品と考えられる。記録作成しないまま取り上げたため、出土位置や状況は不明だが、遺構内の比較的高い位置からの出土であった。

**近世墓S X19** 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X17・18の東にあたる。平面円形で、長径約52cm。遺構検出面からの深さは54cmで、この遺跡のなかでは深いものである。

埋土内からは鉄釘のほか、土師器小皿が出土している。釘は筒形棺に使われていたのであろう。土師器小皿は記録作成しないまま取り上げたため、出土位置や状況は不明である。

**近世墓S X20** 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X18の北にあたる。平面方形で、長軸51cm、短軸42cm。遺構検出面からの深さは53cmで、この遺構もこの遺跡のなかでは深い方である。

埋土内からは人骨や副葬品は見られなかったが、形態から見て近世墓と判断できる。

**近世墓S X21** (第9図) 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X20の北約2mにある。遺構の南部は近世墓S X22と重複する。平面梢円形で、長軸82cm、短軸52cm以上(調査区外に伸びる)。遺構検出面からの深さは9cm程度と浅い。

埋土内から、陶器碗1点、土師器小皿1点が出土した。副葬品と考えられる。陶器碗は墓坑底面近くで出土したため、棺内に埋納されていた可能性が高い。

土師器小皿は記録作成しないまま取り上げたので、出土位置や状況は不明である。

**近世墓S X22** (第9図) 第2次調査区中央部で確認した遺構で、近世墓S X21と重複し、それより古いが、S X21よりも深く掘られた遺構であったため、全体形がわかる。平面梢円形で、長軸72cm、短軸56cm。西部の一部は調査区外に伸びている。遺構検出面からの深さは21cm程度である。

埋土内から、鉄釘1点、土師器小皿1点が出土した。副葬品と考えられる。土師器小皿は墓坑底面から少し上で出土したため、棺内に埋納されていた可能性が高い。

**近世墓S X23** (第9図) 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X21の東にあたる。平面円形で、直径45cmほどのピット状を呈する。遺構検出面からの深さは21cm程度である。

墓坑内の西寄りに、陶器碗2点・土師器小皿1点が副葬されていた。いずれも墓坑底面よりも上で確認され、中央に傾く状態で出土したため、筒形棺の上部に置かれていたと考えられる。

**近世墓S X24** (第9図) 第2次調査区中央部で確認した遺構で、近世墓S X21の北にあたる。平面円形で、直径50cm程度のピット状を呈する。遺構検出面からの深さは19cm程度である。

埋土内から、陶器碗1点、土師器小皿1点、小形培塿1点が出土した。副葬品と考えられる。陶器碗は小片だが、遺構の上部から出土しているため、削平によって破壊・消失したものと考えられる。土師器類は墓坑底面から少し上で、墓坑中央に向かって傾斜するかたちで出土したため、筒形棺の上部に置かれていたものと考えられる。

**近世墓S X25** 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X24の南にあたる。平面梢円形で、長軸68cm、短軸52cm。遺構検出面からの深さは13cmである。

埋土内からは土師器小皿2点が出土している。副葬品と考えられるが、記録作成しないまま取り上げたため、出土位置や状況は不明である。

**近世墓S X26** 第2次調査区中央部で確認した遺構で、近世墓S X24の東にあたる。平面は方形で、一边60cmほど。遺構検出面からの深さは20cmである。埋土内からは人骨や副葬品は見られなかったが、明

確な方形を呈する遺構で、近世墓と判断できる。

**近世墓 S X27**（第10図） 第2次調査区中央部で確認した遺構で、近世墓 S X26の北にある。平面方形で、長辺67cm、短辺45cm以上（調査区外に伸びる）。遺構検出面からの深さは21cm程度である。

埋土内から、土師器皿3点と六道銭が出土した。副葬品と考えられる。六道銭は墓坑底面に近い位置で、針葉樹の板材上に置かれていた。出土状況から、六道銭は家紋の「六文銭」状に並べられてたと考えられる。土師器小皿は出土位置の記録作成前に取り上げたため、出土位置は不明である。

**近世墓 S X28**（第10図） 第2次調査区中央部で確認した遺構で、近世墓 S X27の南にある。平面円形で、直径45cm程度のピット状を呈する。遺構検出面からの深さは21cm程度である。

埋土内から、土師器小皿1点、小形培培1点が出土した。副葬品と考えられる。土師器類は割れた状態で、墓坑底面よりも15cm近く上で出土したため、筒形棺の上部に置かれていたものと考えられる。また、土師器類出土位置から5~10cm程度下で、焼骨灰と考えられる土が確認できた。

**近世墓 S X29**（第10図） 第2次調査区中央部で確認した遺構で、近世墓 S X27の北東にある。平面は長辺66cm、短辺55cmの整った隅丸方形を呈する。遺構検出面からの深さは28cm程度である。

埋土内から、鉄釘、六道銭、陶器碗1点、土師器小皿3点が出土した。副葬品と考えられる。鉄釘は木質痕が残り、棺に用いられたと考えられる。土師器小皿は墓坑壁寄りにあるものや、半分に割れた状態のものなどがある。いずれも墓坑内の墓坑底面よりも少し上から出土しており、方形棺の上に置かれていたと考えられる。

六道銭は二つのまとまりで合計6枚ある。陶器碗はミニチュアともいえる小型のもので、玩具の可能性が高い。六道銭と陶器碗は墓坑底面近くで出土している。なお、六道銭付近からは、焼骨灰と考えられる土が確認できた。六道銭・陶器碗・焼骨灰は、いずれも方形棺内に埋納されていたと考えられる。

**近世墓 S X30** 第2次調査区中央部で確認した遺構で、S X29の南東にある。平面方形で、長辺74cm、短辺44cm以上（調査区外に伸びる）。遺構検出面か

らの深さは17cmである。

埋土内からは陶器碗1点、土師器小皿1点が出土している。副葬品と考えられるが、記録作成しないまま取り上げたため、出土位置や状況は不明である。  
**近世墓 S X31** 第2次調査区北部で確認した遺構である。平面円形で、直径52cm程度のピット状を呈する。遺構検出面からの深さは9cm程度である。

埋土内からは土師器小皿1点が出土している。副葬品と考えられるが、記録作成しないまま取り上げたため、出土位置や状況は不明である。

**近世墓 S X32**（第10図） 第2次調査区北部で確認した遺構で、近世墓 S X31の北にある。平面椭円形で、長軸75cm、短軸65cm。遺構検出面からの深さは30cmである。

埋土内から、人骨（歯）、鉄釘のほか、陶器碗1点、土師器小皿1点が出土した。陶器碗と土師器小皿は副葬品と考えられる。土器類は墓坑中央部分、墓坑底面から15cmほど上で出土したため、筒形棺の上部に置かれていたものと考えられる。

**近世墓 S X33**（第10図） 第2次調査区北部で確認した遺構で、近世墓 S X32の北にある。平面は長辺77cm、短辺61cmの整った隅丸方形を呈する。遺構検出面からの深さは21cm程度である。

墓坑内の西寄りから、土師器小皿1点が出土した。副葬品と考えられる。墓坑内の墓坑底面近くから出土しているが、墓坑の壁際であるため、棺内か棺外かは判断がつかない。

**近世墓 S X34**（第10図） 第2次調査区北部で確認した遺構で、近世墓 S X32の北にある。平面は略円形で、直径44cm程度のピット状を呈する。遺構検出面からの深さは16cm程度である。

埋土内から、土師器小皿2点が出土した。副葬品と考えられる。墓坑内南側の墓坑壁面近くに立てられたような状態で出土しているため、筒形棺の棺外脇に置かれていた可能性が考えられる。

**近世墓 S X35**（第10図） 第2次調査区北部で確認した遺構で、近世墓 S X33の南東にある。平面は整った円形で、直径52cm程度のピット状を呈する。遺構検出面からの深さは17cm程度である。

埋土内から、六道銭と土師器小皿2点が出土した。副葬品と考えられる。土師器小皿は、S X34と同様

に立った状態で出ているが、墓坑中心部に向かった状態であるため、筒形棺の内部に納められていた可能性がある。六道銭は墓坑底面よりも5cm程度上から出土した。また、六道銭の下からは、焼骨灰と考えられる土が確認できた。

**近世墓S X36**（第10図） 第2次調査区北部で確認した遺構で、近世墓S X34の東にある。平面は長辺67cm、短辺58cmの整った隅丸方形を呈する。遺構検出面からの深さは21cm程度である。

墓坑内西寄りの壁際で、磁器紅猪口1点、土師器小皿4点がまとめて出土した。副葬品と考えられる。土器類は、土師器小皿の上に磁器紅猪口を置き、さらに土師器小皿を重ねるという状況で出土している。このため、土器類は方形棺の内側ではなく、外側に重ね置かれたものと考えられる。

**近世墓S X37**（第10図） 第2次調査区北部で確認した遺構で、近世墓S X36の北にある。平面は長辺65cm、短辺41cmのやや不整な長方形を呈する。短軸（小口）側が一段下がっており、小口止めの棺の可能性がある。遺構検出面からの深さは8cm程度と浅い。

墓坑内中央付近で六道銭が出土した。5枚しか無いが、元は6枚あり、後世の削平により滅失したものと考えられる。六道銭は遺構底面にばらまかれたような状態での出土である。

第1表 遺構一覧(1) (近世墓以外)

遺構番号	性 格	調査次	時期	特徴・形状・計測数値など
S K 6	土坑	2次	中世？	遺物なし
S D 7	溝	2次	中世Ⅲ a	土師器鍋
S Z 8	風倒木痕	1・2次	不明	遺物なし
S Z 9	落ち込み	1・2次	近代	田の造成土？
10	欠番			

【第2表 近世墓遺構一覧凡例】

- ・「時期」 第Ⅱ章の区分による
- ・「規模」 「+」としたものは、遺構が調査区外に及んでいるために、実際の大きさは記載数値よりも大きいことを示す。
- ・「遺物」 数値は出土点数を示す

**近世墓S X38** 第2次調査区中央部で確認した遺構で、近世墓S X26の南部にある。平面円形で、直径48cm以上（大部分が調査区外）のピット状を呈する。遺構検出面からの深さは14cmである。

埋土内からは土師器小形埴輪1点が出土している。副葬品と考えられるが、記録作成しないまま取り上げたため、出土位置や状況は不明である。

その他の近世墓と考えられる遺構 冒頭で示したように、出土遺物は無いが、遺構の状態から近世墓と考えられるものが20基ある。これらにS K39～58の遺構名を付与し、第5～7図と第2表に示した。

c その他の遺構

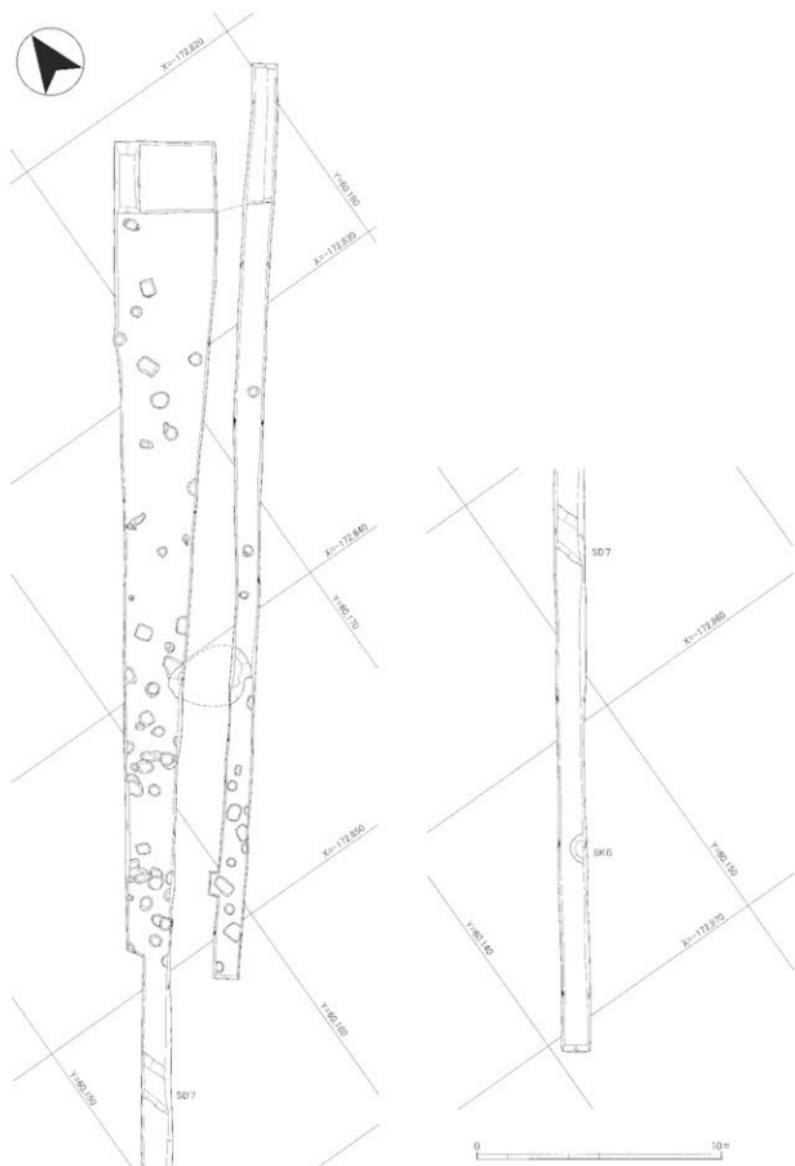
その他の遺構には、風倒木痕のほか、現代に整地された水田と考えられる落ち込みがある。

**風倒木痕S Z 8** 調査区中央部で、第1次・第2次調査区にまたがって確認された。出土遺物は無い。墓地の脇に生えていた木の痕跡であろうか。

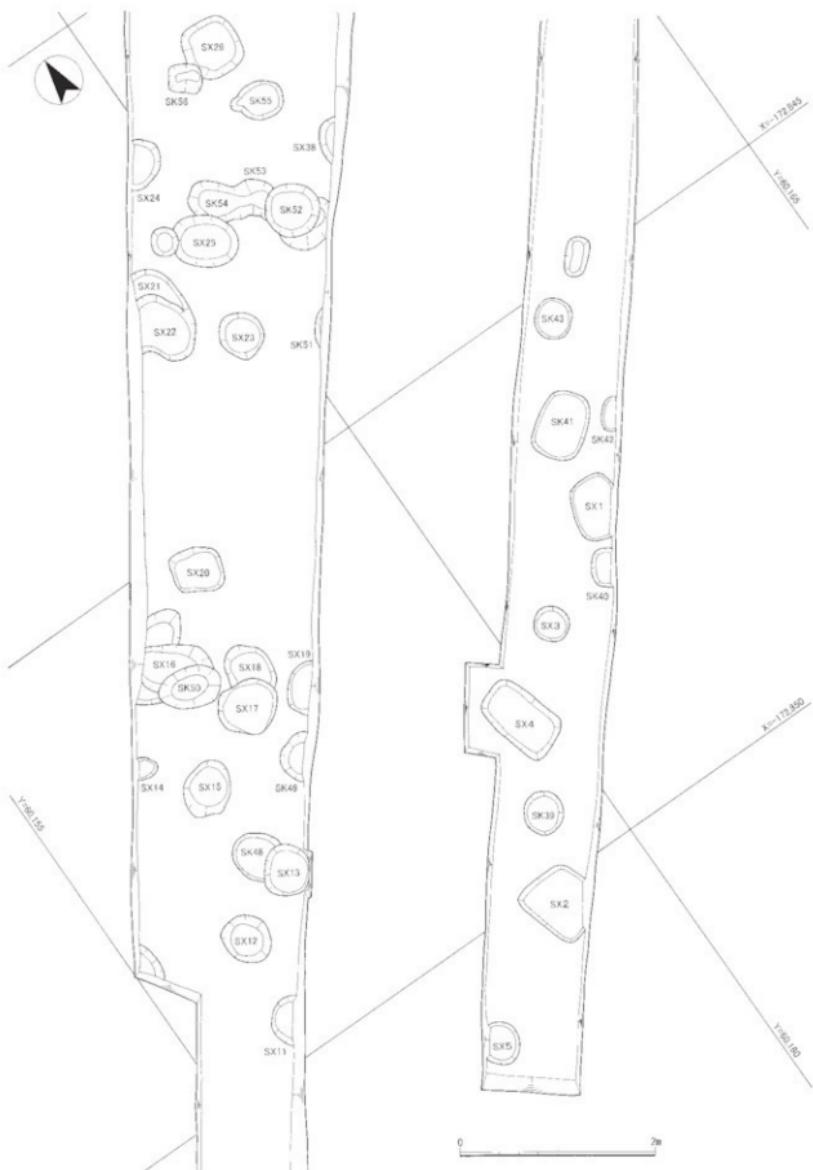
**落ち込みS Z 9** 調査区北部で、第1次・第2次調査区にまたがって確認された。出土遺物は無いが、埋土の状況から現況地割りが形成される直前の地割りを示す落ち込みと考えられる。つまり、当近世墓が機能していた段階には存在していた落ち込みで、具体的には水田であったと考えられる。

第2表 遺構一覧(2) (近世墓)

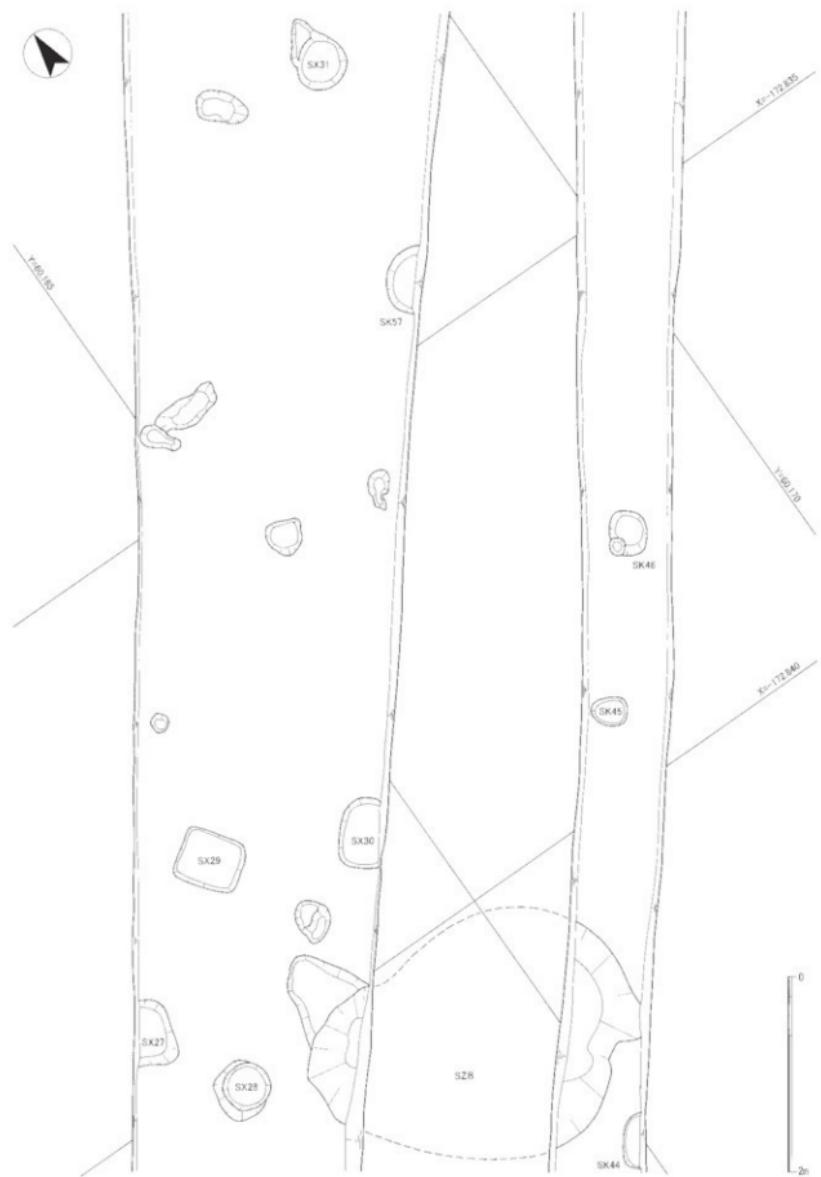
遺構番号	性格	調査次	時期	形態	規模			遺物					備考	
					長(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	人骨	棺材等	土師器皿	陶器類	六道鏡	金属製品	
SX1	近世墓	1次	近世II b	長方	64	47	21	○		2	1		釘	
SX2	近世墓	1次	近世II c	長方	73	62	18	○		2			釘	
SX3	近世墓	1次	近世I末~Ⅲ	円	36	35	11						鍵	
SX4	近世墓	1次	近世II a	長方	78	48	23				2			
SX5	近世墓	1次	不明(近世)	円	42	32+	24							
SX11	近世墓	2次	近世II b	円	51	24+	29			2	1			
SX12	近世墓	2次	近世Ⅲ a	円	50	46	21	○		4	1		鍵	
SX13	近世墓	2次	近世I末	円	52	49	16			2		○	包丁	
SX14	近世墓	2次	不明(近世)	円	22+	22	10							
SX15	近世墓	2次	近世I末~Ⅲ	楕円	58	48	56				○	鎖?	漆矢	
SX16	近世墓	2次	近世Ⅲ a	楕円	75+	55	11		釘	4	1			
SX17	近世墓	2次	近世II b	略円	62	52	20			1	1			
SX18	近世墓	2次	近世	略円	51	49	11			1				
SX19	近世墓	2次	近世Ⅲ a	円	52	22+	54		釘	1			漆矢	
SX20	近世墓	2次	不明(近世)	長方	51	42	53						漆矢	
SX21	近世墓	2次	近世II a	楕円	82	52+	9			1	1			
SX22	近世墓	2次	近世I末	楕円	72	56	21		釘	1				
SX23	近世墓	2次	近世II a	円	46	43	21			1	2			
SX24	近世墓	2次	近世II c	円	52	31+	19			3	1			
SX25	近世墓	2次	近世II c	楕円	68	52	13			2				
SX26	近世墓	2次	近世II b	方	60	58	20							
SX27	近世墓	2次	近世II a	方	67	45+	21		板材	3		○		
SX28	近世墓	2次	近世II b	円	45	47	21	燒灰			2			
SX29	近世墓	2次	近世II c	長方	66	55	28	燒灰	釘	3	1	○		
SX30	近世墓	2次	近世II c	楕円	74	44+	17			1	1			
SX31	近世墓	2次	近世II b	円	54	52	9			1				
SX32	近世墓	2次	近世II c	楕円	75	65	30	○	釘	1	1			
SX33	近世墓	2次	近世Ⅲ a	長方	77	61	21			1				
SX34	近世墓	2次	近世II c	円	44	42+	16			2				
SX35	近世墓	2次	近世I末	円	52	51	17	燒灰		2		○		
SX36	近世墓	2次	近世II b	長方	67	58	21			4	1			
SX37	近世墓	2次	近世I末~II a	長方	65	41	8				○	木口止め?		
SX38	近世墓	2次	近世I末	円	48+	14+	14			1				
SK39	近世墓?	1次	不明(近世)	円	44	41	20							
SK40	近世墓?	1次	不明(近世)	方	40	22+	10							
SK41	近世墓?	1次	不明(近世)	長方	70	52	28							
SK42	近世墓?	1次	不明(近世)	方	35	24+	11							
SK43	近世墓?	1次	不明(近世)	円	42	38	10							
SK44	近世墓?	1次	不明(近世)	長方	43	16+	13							
SK45	近世墓?	1次	不明(近世)	楕円	36	30	8							
SK46	近世墓?	1次	不明(近世)	楕円	46	40	12							
SK47	近世墓?	1次	不明(近世)	円	48	48	15							
SK48	近世墓?	2次	不明(近世)	円	50	48	9							
SK49	近世墓?	2次	不明(近世)	円	50	41+	17							
SK50	近世墓?	2次	不明(近世)	楕円	66	41	15							
SK51	近世墓?	2次	不明(近世)	円?	41+	6+	13+							
SK52	近世墓?	2次	不明(近世)	円	56	52	28							
SK53	近世墓?	2次	不明(近世)	円	43	40	13							
SK54	近世墓?	2次	不明(近世)	楕円	52	42	14							
SK55	近世墓?	2次	不明(近世)	楕円	45	38	5							
SK56	近世墓?	2次	不明(近世)	方	34	28	11							
SK57	近世墓?	2次	不明(近世)	円	71	30+	12							
SK58	近世墓?	2次	不明(近世)	円	46	42	7							



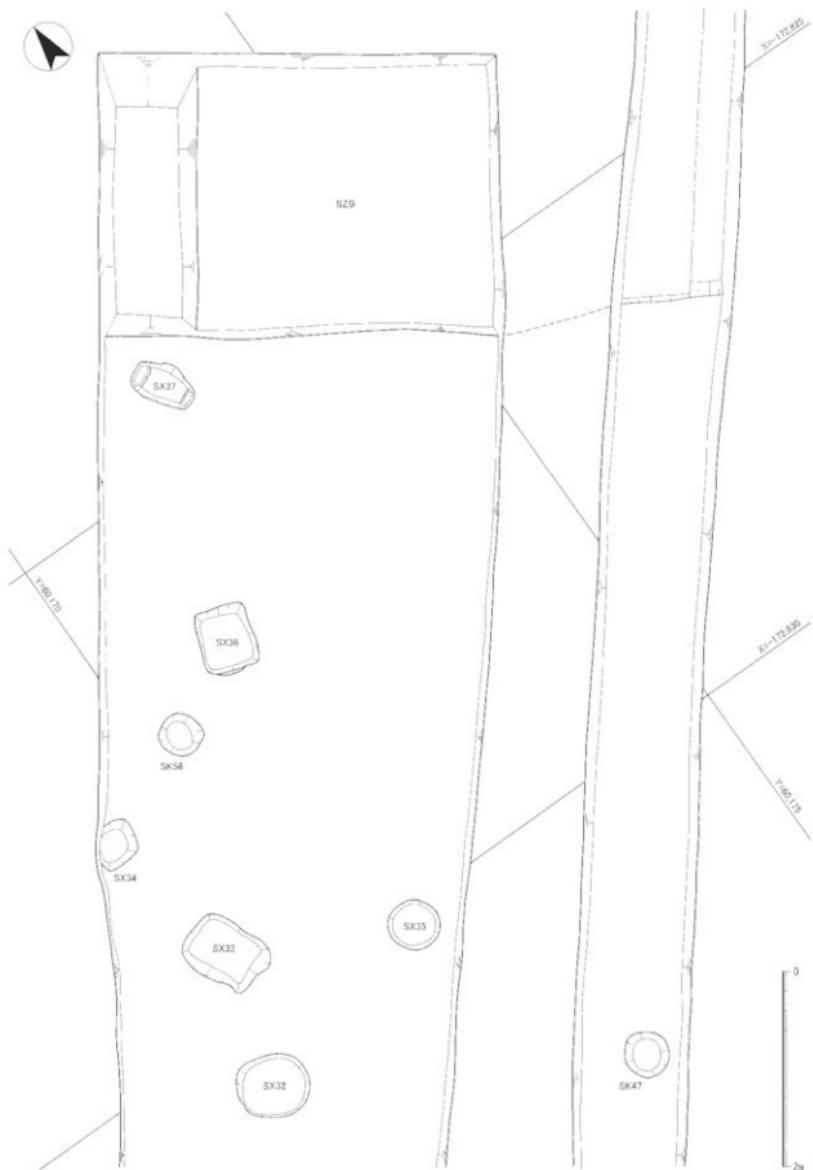
第4図 調査区平面図 (1 : 200)



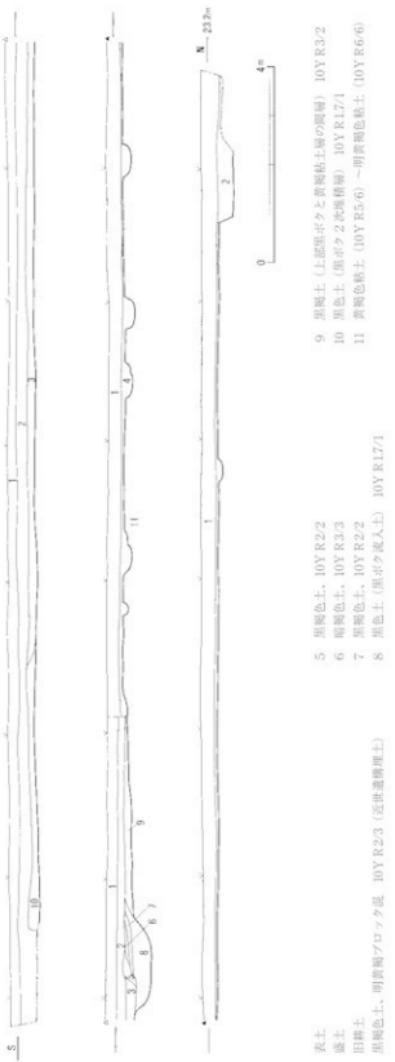
第5図 調査区詳細平面図(1) (1 : 50)



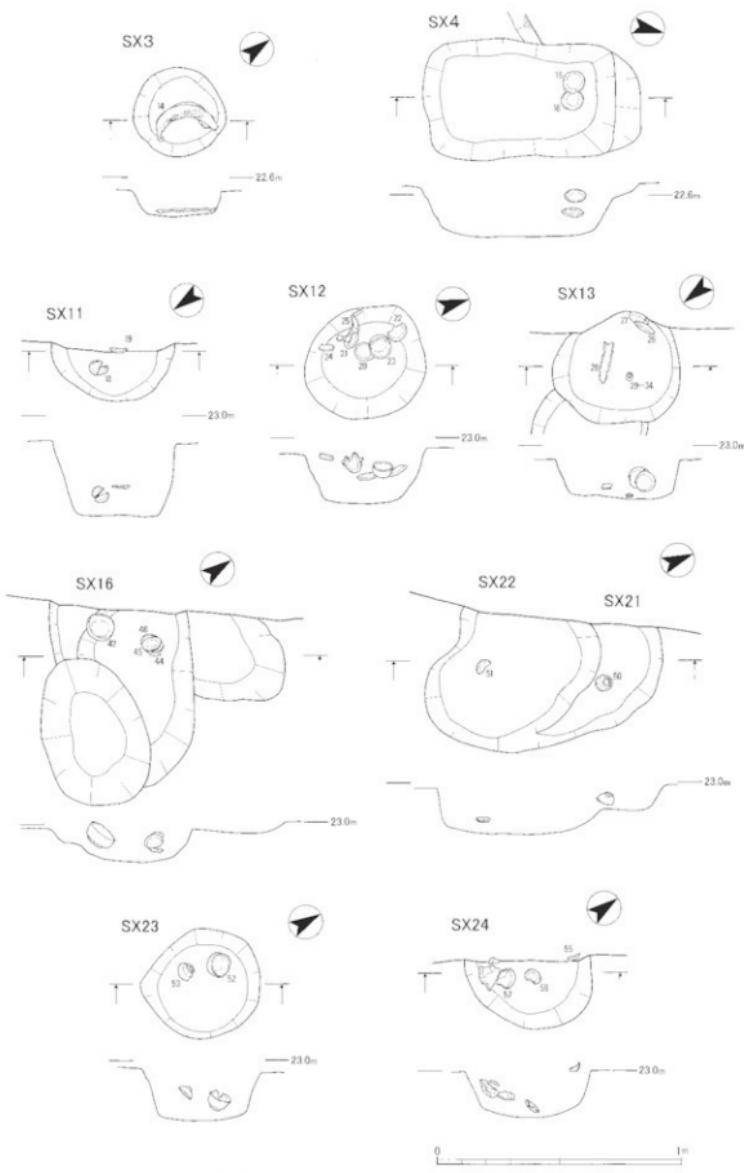
第6図 調査区詳細平面図(2) (1 : 50)



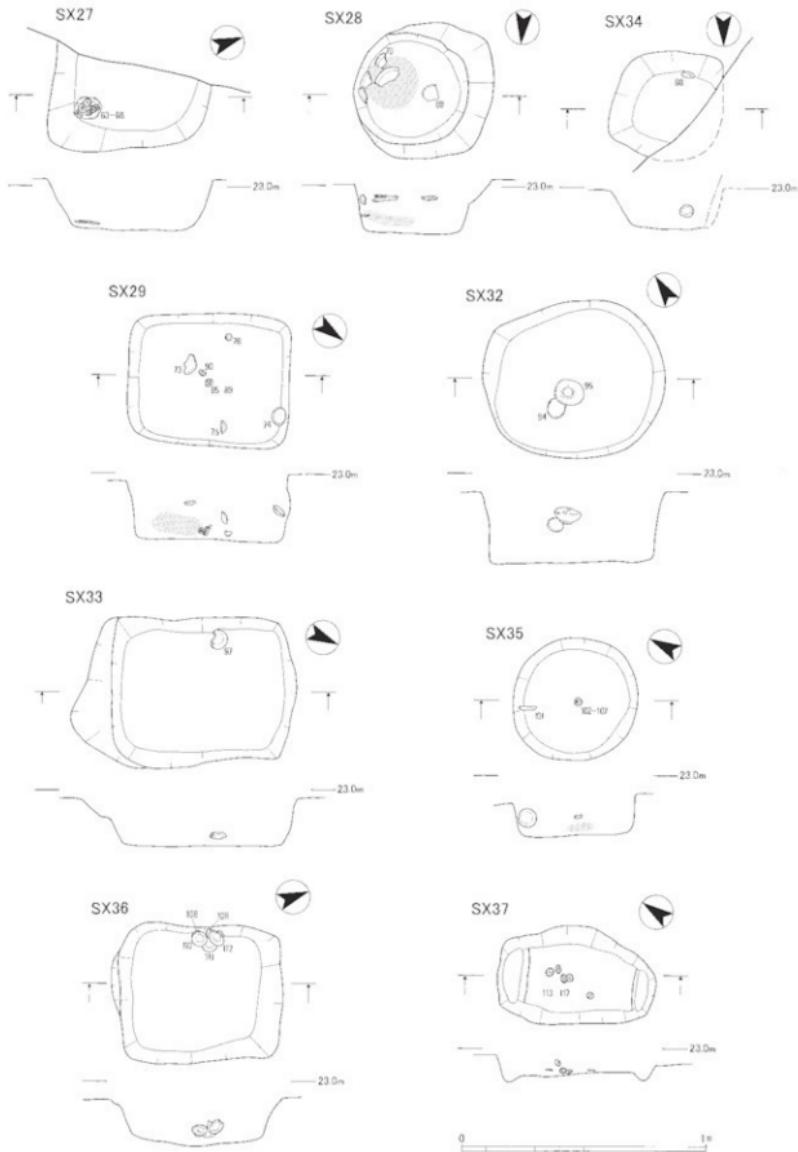
第7図 調査区詳細平面図(3) (1 : 50)



第8図 調査区土層図 (1 : 100)



第9図 近世墓個別構造実測図(1) (1 : 20)



第10図 近世墓個別遺構実測図(2) (1 : 20) ※トーンは骨灰状の土確認位置

## IV 調査の成果～出土遺物～

### 1 概要

円座近世墓群の調査で出土した遺物は、第1次調査分で整理箱に1箱（約0.5kg）、第2次調査分で4箱（約2.6kg）である。内訳は、近世墓の副葬品となる土器類（土師器・陶器・磁器）、金属製品類（銭貨・利器など）が中心で、一部近世墓以前の土器類が見られる。

実測図を第11～13図に示した。図示した遺物の出土地点や詳細については、出土遺物観察表（第3～5表）を参照されたい。

なお、出土陶磁器類に関しては、瀬戸美濃産陶磁器類は藤澤良祐氏の、肥前産陶磁器類は堀内秀樹氏のご教示に拠るところが多い。

### 2 中世以前の遺物

出土した遺物には、平安時代中期頃の土師器と中世の土器類がある。

**平安時代中期の土器（1～3）** いずれも小片で、近世墓の墓坑内から混入遺物として出土したものである。口縁端部外面に面をなし、その先端が突出してやや内側に頗る形態である。平安時代中期の、9世紀後半から10世紀頃のものと考えられる。

**溝S D 7出土遺物（4）** 4は土師器の鍋で小形のもの。頭部が緩やかな屈曲を持ち、口縁部は内面に折り返すものである。外面には粗いハケメが右下がりに施されている。口縁部は南伊勢系鍋第1段階のものと共通するが、小形の鍋であることとハケメの施し方から、南伊勢中世Ⅲa期、南伊勢系鍋では第3段階aに相当する時期のものと考えられる<sup>(1)</sup>。

なお、S D 7からはこの他に陶器碗（山茶碗）の破片も出土している。

### 3 近世墓および近世の遺物

近世の遺物は、その大部分が近世墓の副葬品として出土したものである。土器類のほか、金属製品類、木製品類がある。

**近世墓S X 1出土遺物（5～8）** 5・6は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。底は平たく、そこから口縁部が比較的明確な屈曲を持って直線的に立ち上がる形態となる。口縁部内外面には弱いながらもヨコナデが施されている。大きく見れば、中世南伊勢系C・D形態土師器皿<sup>(2)</sup>の系譜を引くものであろう。

7は陶器碗。瀬戸美濃産の腰錫茶碗に相当する。外面には柳状工具による回転横線文が施されている。釉は、外面下半に黒褐色、外面上半から内面にかけて浅黄色系のものを施している。瀬戸・美濃登窯編年<sup>(3)</sup>の第8小期（18世紀後葉）頃のものと考えられる。

8は鉄釘。断面方形で、外側には木質痕が残る。棺に用いられたと考えられる。

**近世墓S X 2出土遺物（9～13）** 9・10は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。9は平たい体部から口縁端部を強く屈曲させて立ち上がらせている。10は全体に弧状を呈する断面形である。いずれも口縁部にヨコナデが施されている。

11～13は鉄釘。いずれも断面方形で、11・12の頃部は敲打による屈曲が見られる。外面には2種類の木質痕が見られ、板状部材（棺）を接合したものと考えられる。

**近世墓S X 3出土遺物（14）** 鉄鎌のみが出土した。14は茎部先端を鉤手状に屈曲させた鎌。先端部の欠損は当初からのもの。図示した部分の面に木質痕が見られるが、鎌の柄に相当するものではなく、棺の底板に相当するものと考えられる。

**近世墓S X 4出土遺物（15・16）** 15・16は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。いずれも底は平たく、そこから口縁部が比較的明確な屈曲を持って直線的に開く形態である。口縁部内面には中央に棱を持つ2段のヨコナデが見られる。中世南伊勢系D形態皿の系譜を引くものと考えられ、17世紀後半頃のものではないかと考えられる。

**近世墓S X 11出土遺物（17～19）** 17は陶器碗。瀬

戸美濃産の丸碗である。内外面には赤褐色の釉が施される。瀬戸・美濃登窯編年の第8小期（18世紀後葉）頃のものと考えられる。

18は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。平たい底部から丸く立ち上がる口縁部となる。中世南伊勢系B形態の系譜と考えられるが、口縁部内外面にはヨコナデが施されている点が異なっている。

19は土師器皿。口縁部が強く屈曲して開き、端部は上方にやや突出させている。後述の小形結塔と形態的な類似が考えられるが、ここではひとまず皿として扱った。

**近世墓S X12出土遺物**（20～25）20～22は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。いずれも平たい底部から短い口縁部が緩く立ち上がる形態で、口縁部にはヨコナデが施されている。20・22は内面見込みに1単位のナデを施しているという手法上の共通性がある。

23は陶器碗。瀬戸美濃産の丸碗である。高台は回転ケズり出しで露胎。外面上半から内面にかけて暗褐色の釉を施す。瀬戸・美濃登窯編年の第8小期（18世紀後葉）のものと考えられる。

24は鉄製品で鍔か。刃部はほとんど欠損している。25は鎌で、茎尻は特別な細工を行わずにそのまま収めている。調査時点で4片に離れた状態で出土したことから、人為的に切断したものを副葬したと考えられる。刃部先端が見あたらないのも、この関係かと考えられる。

**近世墓S X13出土遺物**（26～34）26・27は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。いずれも平たい底部から緩やかに開く口縁部となる。口縁部内面にはヨコナデによる強い段を持っています。中世南伊勢系D形態皿の系譜を引くものと考えられ、前述の15・16よりはやや新しい、18世紀初頭頃のものではないかと考えられる。

28は鉄製品で、形態から包丁と考えられる。刃部と茎部が直線的になる形態で、峰側が突出している。刃部先端は人為的に切断されている。

29～34は銭貨で、いずれも寛永通寶。六文銭（六道銭）として副葬されていたものである。29・30がいわゆる「古寛永」、31～34がいわゆる「新寛永」である。鈴木公雄氏による六文銭の組合せから見た

時期区分<sup>(4)</sup>（以下、「六文銭区分」）ではIV期以降（1697年以降）となる。

**近世墓S X15出土遺物**（35～41）35～40は銭貨で、いずれも寛永通寶。六文銭（六道銭）として副葬されていたものである。35・36がいわゆる「古寛永」、37～40がいわゆる「新寛永」である。六文銭区分ではIV期以降（1697年以降）となる。41は鉢か何かの先端と考えられる。これも人為的に切断された破片と考えられる。

**近世墓S X16出土遺物**（42～46）52は陶器碗。瀬戸美濃産の小碗で、「せんじ」とされる器種にあたる。外面の腰部に一条の沈線がめぐる。浅黄色の釉が外面高台付近を除き全体に施されるが、外面の一部を意図的に褐色へと変色させている。瀬戸・美濃登窯編年の第8小期（18世紀後葉）に見られるものである。

43～46は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。いずれも平たい底部から口縁部が緩やかに開く。43以外は口縁部にヨコナデが見られる。

**近世墓S X17出土遺物**（47）47は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。断面形は弧状を呈する。口縁部にはヨコナデが施されている。

**近世墓S X19出土遺物**（48・49）48は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。やや凸凹のある底部から緩やかに開く口縁部となる。口縁部にはヨコナデが施されている。

49は鉄釘。断面方形で、頭部は敲打によって潰れている。外面には2種類の木質痕が見られ、板状部材（棺）を接合したものと考えられる。

**近世墓S X21出土遺物**（50）50は陶器碗。瀬戸美濃産の小碗である。高台はケズり出し。外面上半から内面にかけて灰釉を施している。17世紀後半代のものであろうか。

**近世墓S X22出土遺物**（51）51は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。やや凸凹のある底部から緩やかに開く口縁部となる。全体がオサエ・ナデ調整で、口縁部にヨコナデは施されていない。

**近世墓S X23出土遺物**（52～54）52は陶器碗。瀬戸美濃産の丸碗である。高台は、貼付か削り出しか不明。外面上半から内面にかけて灰釉を施している。瀬戸・美濃登窯編年の第7小期（18世紀中葉）頃の

ものと考えられる。53は陶器碗。瀬戸美濃産の小碗。高台はケズり出し。外面上半から内面にかけて灰釉を施している。瀬戸・美濃登窯編年の第5・6小期（17世紀後葉～18世紀初頭）のものである。

54は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。器壁はやや厚く、平たい底部から緩やかに開く口縁部となる。全体がオサエ・ナデ調整で、口縁部にヨコナデは施されていない。中世南伊勢系B形態の系譜であろうか。

**近世墓S X24出土遺物（55～57）** 55は陶器碗。瀬戸美濃産の刷毛目茶碗である。外面には白線を引いたような釉、内面には釉ダレを表現したような白色釉が掛かり、全体に淡緑色の釉がかかっている。瀬戸・美濃登窯編年の第8小期（18世紀後葉）頃のものと考えられる。

56は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。平たい底部から緩やかに開く口縁部となる。口縁部にはヨコナデが施されている。中世南伊勢系B形態の系譜であろうか。

57は土師器で、小形の焙烙と考えられる。丸底の底部から屈曲して開く口縁部となる。底部外面にケズリは見られないが、内面の板ナデや口縁部の屈曲などに通常の焙烙（口縁部径40cmほど）との共通性がある。

**近世墓S X25出土遺物（58）** 58は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。平たい底部から緩やかに開く口縁部となる。内面見込みに1単位のナデ、口縁部にはヨコナデが施されている。

**近世墓S X26出土遺物（59）** 59は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。平たい底部から短く口縁部が立ち上がるるものである。内面見込みに1単位のナデ、口縁部にはヨコナデが施されている。

**近世墓S X27出土遺物（60～68）** 60～62は土師器小皿。いずれも南伊勢在地の系統と考えられる。60は平たい小さな底部から口縁部が大きく開くものである。61・62はよく似た形態だが、61は口縁部にヨコナデが施されるのに対し、60にはヨコナデが見られない。

63～68は銭貨で、いずれも寛永通寶。六文銭（六道銭）として副葬されていたものである。63は背に「文」の字がある「新寛永」、64～68は背が無文

の「新寛永」である。六文銭区分ではIV～V期以降（1697年以降）となる。

**近世墓S X28出土遺物（69・70）** 69は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。丸みを帯びた底部から緩やかに開く口縁部となる。口縁部にはヨコナデが施されている。外面には直径4mm程度の円形の圧痕が見られるが、何の圧痕か分からない。中世南伊勢系B形態の系譜であろうか。

70は土師器で、小形の焙烙である。丸底の底部から屈曲して開く口縁部となり、口縁端部は内側に少し折り曲げられる。内面にはケズリが見られ、通常の焙烙（口縁部径40cmほど）との共通性がある。

**遺構外出土遺物（71・72）** レイアウトの都合上、ここに遺構外出土遺物を掲載した。71は土師器の小形焙烙。口縁部は外反し、上面に小さな面を持つ。72は陶器皿で、瀬戸美濃産の描絵皿にあたる。外面上半から内面にかけて釉が施されている。内面見込みには梅花と考えられる描繪を3ヶ所に施している。

瀬戸・美濃登窯編年の第7～8小期（18世紀後葉）頃のものと考えられる。

**近世墓S X29出土遺物（73～90）** 73～75は土師器小皿。いずれも南伊勢在地の系統と考えられる。73は断面弧状を呈し、口縁部にはヨコナデが施されている。74は同様に断面弧状を呈するが、底部中央は盛り上がりしている。75は74に近く、底部中央の盛り上がりは小さい。

76は磁器で、ミニチュアの碗である。肥前産と考えられる。外面には羽子板と羽根がそれぞれ2つづつ描かれ、高台置付以外は白色の釉で包まれている。18世紀後半から19世紀前半頃のものと考えられる。

77～84は鉄釘。いずれも断面方形。全体が残っているのは77のみで、全長36cmである。いずれも外面には2種類の木質痕が見られ、板状部材（棺）を接合したものと考えられる。

85～90は銭貨で、いずれも寛永通寶。六文銭（六道銭）として副葬されていたものである。85～87はいわゆる「古寛永」、88・89はいわゆる「新寛永」、90は「鉄銭」である。90は、大きさとしては四文銭にあたるが、一文銭が鋳彫れした可能性もある。六文銭区分ではIV期以降（1697年以降）となるが、鉄銭があるため、1739年以降となる。

**近世墓 S X30出土遺物** (91・92) 91は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。丸い底部から屈曲して開く口縁部となる。口縁部にはヨコナデが施されている。

92は陶器碗で、瀬戸美濃産の丸碗にあたる。外面上半から内面にかけて褐色の釉が施されている。瀬戸・美濃登窯編年の第8小期（18世紀後葉）頃のものと考えられる。

**近世墓 S X31出土遺物** (93) 93は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。平たい底部から屈曲して開く口縁部となる。口縁部にはヨコナデが施されている。形態から、中世南伊勢系D形態の系譜と考えられる。

**近世墓 S X32出土遺物** (94～96) 94は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。平たい底部から緩やかに開く口縁部となる。口縁部にはヨコナデが施され、内面見込みに1単位のナデがている。形態から、中世南伊勢系D形態の系譜と考えられる。

95は磁器碗。波佐見の丸形碗である。外面には染付で梅花文と横線、内面は見込みの釉が掻き取られている。波佐見編年のV-2・3期<sup>(3)</sup>頃に相当し、18世紀後半から19世紀初頭頃のものと考えられる。

**近世墓 S X33出土遺物** (97) 97は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。丸い底部から緩やかに開く口縁部となる。口縁部にはヨコナデが施されている。

**近世墓 S X34出土遺物** (98・99) 98・99は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。98は断面強状で、全体をオサエ・ナデで調整している。中世南伊勢系A形態の系譜か。99は平たい底部から強く屈曲して開く口縁部となる。口縁部にはヨコナデが施されている。

**近世墓 S X35出土遺物** (100～107) 100・101は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。100は平たい底部から緩やかに開く口縁部となる。101は平たい底部から緩やかに屈曲して直線的な口縁部となるものである。いずれも口縁部にはヨコナデが施されている。

102～107は銭貨で、いずれも寛永通寶。六文銭（六道銭）として副葬されていたものである。102・103はいわゆる「古寛永」、104は背に「文」の字がある「新寛永」、105～107は「新寛永」である。六文銭区分ではⅣ期以降（1697年以降）となる。

**近世墓 S X36出土遺物** (108～112) 108は磁器で、肥前産の紅猪口にあたる。外面には染付で複線の锯歯状文が施される。高台疊付のみ露胎となる。肥前磁器編年のV期（18世紀後葉～19世紀中葉）に相当すると考えられる。

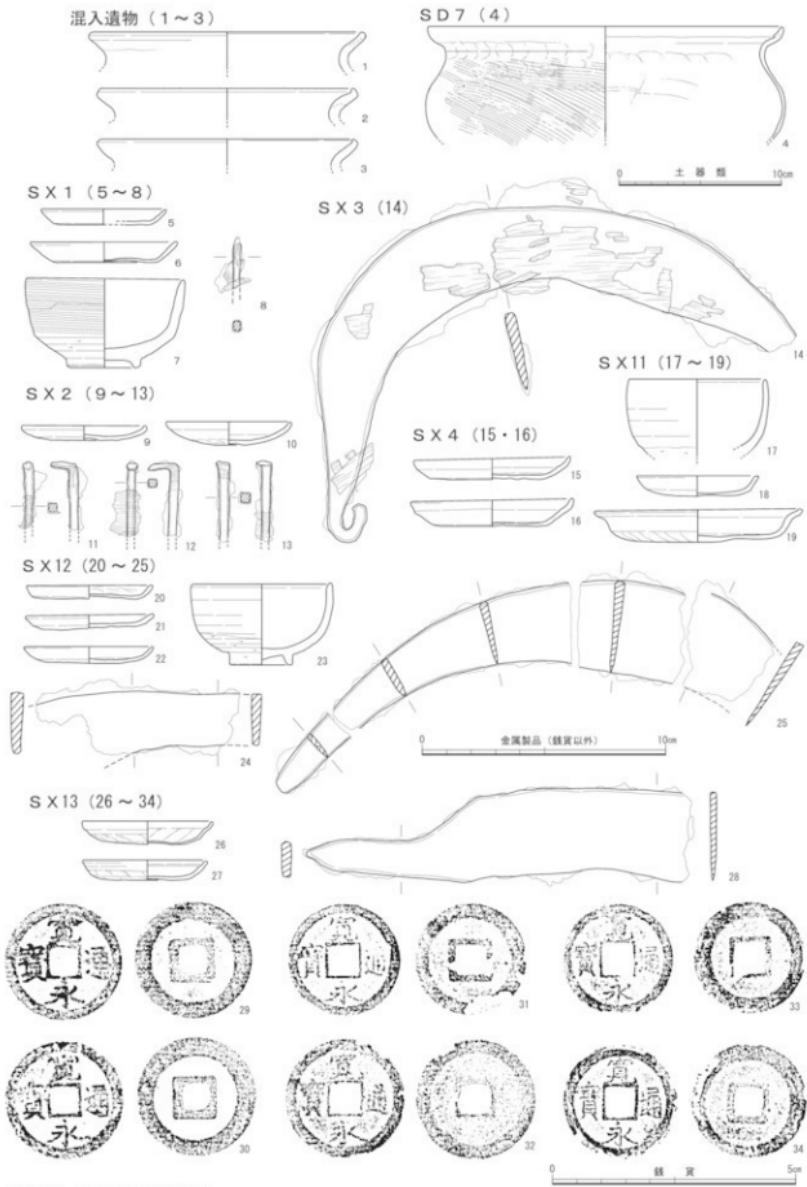
109～112は土師器小皿。南伊勢在地の系統と考えられる。109は丸い底部から緩やかに開く口縁部となる。110～112は類似したもので、平たい底部から屈曲して直線的に開く口縁部となる。口縁端部は内側が少し四線状となる。内面見込みに1単位のナデ、口縁部にはヨコナデが施されている。

**近世墓 S X37出土遺物** (113～117) 113～117は銭貨で、いずれも寛永通寶。六文銭（六道銭）として副葬されていたと考えられるが、造構が浅かつたために撲乱を受けたのか、出土したのは5枚である。113～115はいわゆる「古寛永」、116・117は背に「文」の字がある「新寛永」である。六文銭区分ではⅢ期以降（1668年以降）となる。

**近世墓 S X38出土遺物** (118) 118は土師器で、小形の培培である。丸底の底部から屈曲して開く口縁部となり、口縁端部は外面に面をなす。内面には炭化物、外面には煤が付着しており、煮炊きに用いられたことは明らかである。

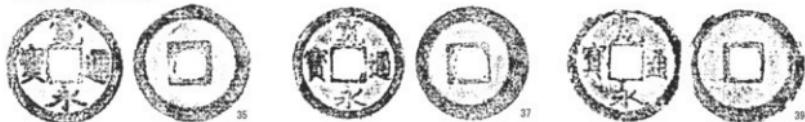
## 【注】

- (1)伊藤裕作「南伊勢・志摩地域の中世土器」（『三重県史』資料編考古2、2008年）
- (2)伊藤裕作「土師器皿類の変遷」（『北畠氏館跡9』三重県美杉村教育委員会、2005年）
- (3)藤澤良祐はか『愛知県史』別編産業2中世・近世瀬戸系（2007年）
- (4)鈴木公雄「出土六道銭の考古学的分析」（同氏著『出土銭貨の研究』東京大学出版会、1999年）
- (5)九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年』（2000年）

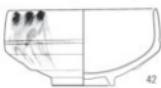


第11図 出土遺物実測図(1)

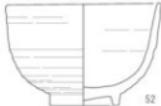
S X 15 (35 ~ 41)



S X 16 (42 ~ 46)



S X 23 (52 ~ 54)



S X 25 (58)



S X 26 (59)



S X 27 (60 ~ 68)



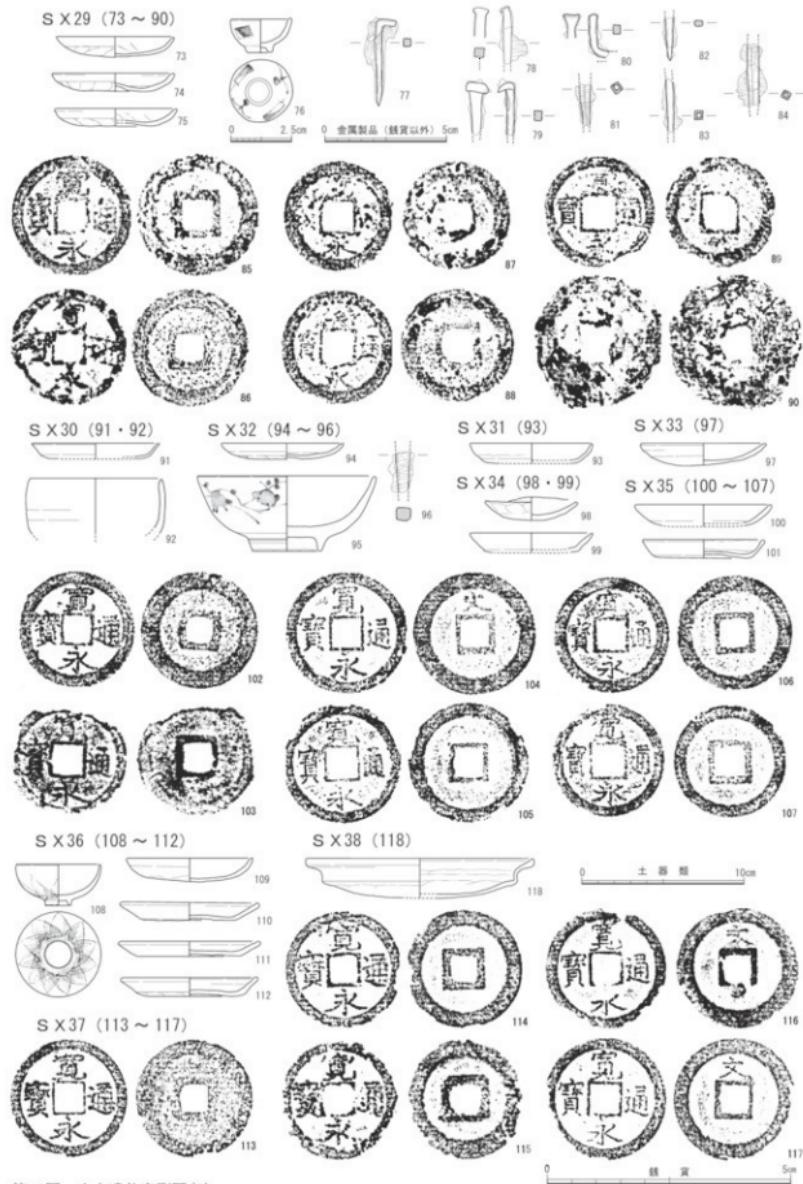
S X 28 (69 ~ 70)



遺構外 (71 ~ 72)



第12図 出土遺物実測図(2)



第13図 出土遺物実測図(3)

第3表 円座近世墓群出土遺物(土器類)観察表(1)

番号	実測番号	様・質	器種等	次数	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	74	土器器	更	2次	S X16(混入) 無	(II)170 (II)160	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	10Y R7/4 10Y R7/3	にぶい黄橙 にぶい黄橙	口縁部片
2	72	土器器	更	2次	S X20(混入) 無	(II)160	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	10Y R6/3	にぶい黄橙	口縁部片
3	73	土器器	更	2次	S X22(混入) 無	(II)160	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	10Y R6/3	にぶい黄橙	口縁部片
4	74	土器器	鍋	2次	S D7	(II)218	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	10Y R8/3	浅黄橙	口縁3/12 外面に煤
5	35	土器器	小皿	1次	S X1 (高)109	(II)172 (II)196 (II)193	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ(弱) 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 YR6/6	橙	口縁6/12
6	33	土器器	小皿	1次	S X1 (高)113	(II)196 (II)193	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ(弱) 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R6/6	橙	口縁11/12
7	34	陶器	碗	1次	S X1 (高)155	(II)198 (高)109	外:クロロナデ→高台クリ出し・ 旋製工芸による側面→施釉 内:クロロナデ→施釉	密	10Y R8/3	淡黄橙	口縁11/12 潜戸 腰錦茶碗
9	36	土器器	小皿	1次	S X2 (高)109	(II)178 (高)109	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ(弱) 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 YR6/6	橙	口縁4/12 歪み
10	37	土器器	小皿	1次	S X2 (高)14	(II)172 (高)14	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 YR6/6	橙	口縁7/12
15	31	土器器	小皿	1次	S X4 No.1 (高)124	(II)196 (高)124	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 YR6/6	橙	ほぼ完存
16	32	土器器	小皿	1次	S X4 No.2 (高)124	(II)100 (高)124	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 YR6/6	橙	完存
17	81	陶器	碗	2次	S X11	(II)85 (II)175	外:クロロナデ→施釉 内:クロロナデ→施釉	密	25Y R8/2 5 Y R4/3	灰白 灰(輪)	口縁3/12 潜戸 丸輪(褐色輪)
18	78	土器器	小皿	2次	S X11 p1 (高)114	(II)126 (II)178	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75Y R7/6	橙	口縁11/12
19	84	土器器	皿	2次	S X11 (高)20	(II)126 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	5 YR6/6	橙	ほぼ完存 外面部は掌状痕	
20	62	土器器	小皿	2次	S X12 p2 (高)107	(II)178 (II)179	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R7/6	橙	完存 内面見込みに1単位ナデ
21	58	土器器	小皿	2次	S X12 p1 (高)110	(II)179 (高)110	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R6/6	橙	口縁11/12
22	63	土器器	小皿	2次	S X12 p4 (高)110	(II)180 (II)178	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R7/6	橙	完存 内面見込みに1単位ナデ
23	64	陶器	碗	2次	S X12 p3 (高)156	(II)182 内:クロロナデ→施釉	外:クロロナデ→高台クリ出し→施釉 内:クロロナデ→施釉	密	25Y R8/2	灰白	完存 潜戸 丸輪(褐色輪)
26	92	土器器	小皿	2次	S X13 p1 (高)115	(II)180 (II)178	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75Y R7/6	橙	完存 中世のD系統
27	91	土器器	小皿	2次	S X13 p2 (高)112	(II)178 (II)179	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75Y R7/6	橙	完存 中世のD系統
42	83	陶器	碗	2次	S X16 p1 (高)42	(II)192 内:クロロナデ→施釉	外:クロロナデ→高台クリ出し→施釉 内:クロロナデ→施釉	密	25Y R8/2 5 YR7/3	灰白 浅黄(輪)	ほぼ完存 潜戸 小輪(せんじ) 高台 施釉を研磨
43	89	土器器	小皿	2次	S X16 (高)113	(II)175 (II)178	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	75Y R6/6	橙	口縁2/12
44	88	土器器	小皿	2次	S X16 p5 (高)118	(II)178 内:ナデ→ヨコナデ	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R6/8	橙	ほぼ完存
45	86	土器器	小皿	2次	S X16 p2 (高)111	(II)179 内:ナデ→ヨコナデ	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75Y R6/6	橙	完存
46	87	土器器	小皿	2次	S X16 p3 (高)111	(II)179 内:ナデ→ヨコナデ	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R6/6	橙	完存 内面見込みに十字形のナデ
47	85	土器器	小皿	2次	S X17 (高)112	(II)158 内:ナデ→ヨコナデ	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 YR6/6	橙	口縁2/12
48	75	土器器	小皿	2次	S X19 (高)110	(II)180 内:ナデ→ヨコナデ	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75Y R6/6	橙	口縁5/12
50	104	陶器	碗	2次	S X21 p1 (高)33	(II)162 内:クロロナデ→クロロケリ→施釉	外:クロロナデ→クロロケリ→施釉 内:クロロナデ→施釉	密	25Y T7/2 5 Y T7/3	灰黄 浅黄(輪)	口縁9/12 高(輪)12/12 潜戸
51	41	土器器	小皿	2次	S X22 p1 (高)109	(II)178 内:ナデ	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	5 YR6/8	橙	口縁5/12
52	107	陶器	碗	2次	S X23 p2 (高)162	(II)192 内:クロロナデ→施釉	外:クロロナデ→クロロケリ→施釉 内:クロロナデ→施釉	密	25Y T7/1 5 Y T7/2	灰白 灰白(輪)	ほぼ完存 高台整形手法不明
53	105	陶器	碗	2次	S X23 p1 (高)133	(II)162 内:クロロナデ→クロロケリ→施釉	外:クロロナデ→クロロケリ→施釉 内:クロロナデ→施釉	密	25Y T7/2 5 Y T6/3	灰黄 リーフ 黄(輪)	ほぼ完存 潜戸
54	45	土器器	小皿	2次	S X23 (高)12	(II)170 内:ナデ	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	5 Y R7/6	橙	口縁3/12
55	106	陶器	碗	2次	S X24 p3 (II)121	外:クロロナデ→施釉 内:クロロナデ→施釉	外:クロロナデ→施釉 内:クロロナデ→施釉	密	25Y T7/2 5 Y 6/2	灰黄 灰白(輪)	口縁2/12 潜戸 刷毛目茶碗
56	94	土器器	小皿	2次	S X24 p1 (高)12	(II)172 内:ナデ→ヨコナデ	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75Y R6/6	橙	口縁11/12
57	98	土器器	培塿	2次	S X24 p2 (高)22	(II)139 内:ナデ→ヨコナデ	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75Y R7/6	橙	口縁9/12 小形
58	93	土器器	小皿	2次	S X25 (高)18	(II)180 内:ナデ→ヨコナデ	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75Y R7/6	橙	内面見込みに1単位ナデ
59	46	土器器	小皿	2次	S X26 (高)08	(II)170 内:ナデ→ヨコナデ	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R6/6	橙	内面見込みに1単位ナデ
60	43	土器器	小皿	2次	S X27 (高)11	(II)158 内:ナデ→ナデ	外:オサエ・ナデ 内:ナデ→ナデ	密	5 Y R7/6	橙	口縁3/12
61	44	土器器	小皿	2次	S X27 (高)110	(II)170 内:ナデ→ヨコナデ	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R7/6	橙	口縁4/12
62	42	土器器	小皿	2次	S X27 (高)110	(II)170 内:ナデ	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	5 Y R7/6	橙	口縁2/12

第4表 円座近世墓群出土遺物(土器類)観察表(2)

番号	実測番号	様・質	器種等	次数	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項	
69	99	土器器	小皿	2次	S X28 p2 (高)12	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75YR6-6 橙	口縁6/12	外面に円形压痕(φ 4 mm)		
70	97	土器器	結婚	2次	S X28 p1 (I)112	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ・ケズリ	密	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁 12/12	小形		
71	96	土器器	結婚	2次	調査区西端から 6m、気合橋	(I)142	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	75Y R7/6 橙	口縁2/12	小形	
72	11-2	陶器	皿	2次	調査区西端から 15m地点 灰土 (高)130	(I)122 (I)172	外:クロコロテ→クロコスリ→ 貼付高台・施釉(指絵) 内:ナデ→ヨコナデ	密	25YT/1 底白 5 YT/2 底白(輪)	口縁6/12 高台 12/12	窓戸 指絵皿	
73	95	土器器	小皿	2次	S X29 p1 (高)12	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75YR6-6 橙	口縁6/12			
74	103	土器器	小皿	2次	S X29 p3 (高)11	(I)174 (高)11	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5YR6-6 橙	ほぼ完存		
75	102	土器器	小皿	2次	S X29 p2 (高)13	(I)174 (高)13	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5YR6-6 橙	口縁3/12		
76	113	陶器	ミニア ニア	2次	S X29 p4 (高)14	(I)125 (高)14	外:クロコロテ→染付施釉(羽 目模様と指絵) 内:施釉	密	75Y8/1 底白	完存	肥前 ミニチュア品	
91	7-6	土器器	小皿	2次	S X30 (高)10	(I)178 (高)10	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR6/4 にぶい黄橙	口縁4/12		
92	8-2	陶器	碗	2次	S X30 (I)82	外:クロコロテ→施釉 内:クロコロテ→施釉	密	10YR6-3 浅黄橙 75YR4-3 梗(輪)	口縁1/12	窓戸 丸輪(褐色輪)		
93	77	土器器	小皿	2次	S X31 (高)12	(I)175 (高)12	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75Y R6/4 にぶい橙	口縁2/12		
94	10-1	土器器	小皿	2次	S X32 p2 (高)10	(I)178 (高)10	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75YR6-6 橙	完存	内面見込みに1単位ナデ	
95	11-1	磁器	碗	2次	S X32 p1 (I)110 (高)45	(I)110 (高)45	外:クロコナ→クロコスリ→発汗・暗 軸施釉(丸)	密	25Y8/1 底白	ほぼ完存	波佐見 丸形碗	
97	52	土器器	小皿	2次	S X33 p1 (高)12	(I)172 (高)12	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 YR6-6 橙	口縁9/12		
98	48	土器器	小皿	2次	S X34 (高)11	(I)152 (高)11	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	5 YR6-6 橙	口縁8/12		
99	47	土器器	小皿	2次	S X34 (高)12	(I)175 (高)12	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R7/6 橙	口縁4/12		
100	53	土器器	小皿	2次	S X35 p1 (高)15	(I)184 (高)15	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R7/6 橙	口縁1/12		
101	56	土器器	小皿	2次	S X35 p1 (高)12	(I)172 (高)12	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	75Y R8/4 浅黄橙	ほぼ完存		
108	65	磁器	紅酒	2次	S X36 p5 (高)25	(I)152 (高)25	外:クロコロナ→染付 内:クロコロナ	密	N8/ 底白	口縁3/12	肥前 置付のみ露胎	
109	55	土器器	小皿	2次	S X36 p4 (高)14	(I)178 (高)14	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R7/6 橙	ほぼ完存		
110	54	土器器	小皿	2次	S X36 p1 (高)12	(I)186 (高)12	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R7/6 橙	完存	内面見込みに1単位ナデ	
111	57	土器器	小皿	2次	S X36 p3 (高)11	(I)187 (高)11	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5 Y R7/6 橙	ほぼ完存	内面見込みに1単位ナデ	
112	61	土器器	小皿	2次	S X36 p1 (高)12	(I)184 (高)12	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	25YT/6 橙	口縁 11/12	内面見込みに1単位ナデ	
118	51	土器器	結婚	2次	S X38 (高)24	(I)140 (高)24	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	75Y R6/4 にぶい橙	口縁2/12	小形 内面に炭化物、口縁部に傷	

第5表 円座近世墓群出土金属製品観察表

番号	実測番号	素材	名称	次数	造構・層名等	長・径(cm) 残存+	幅・径(cm) 残存+	厚(cm)	断面形	特記事項
8	2-1	鉄	釘	1次	S X 1	2.3+	0.4	0.3	長方形	本質遺存(2種類) 極用か
11	2-4	鉄	釘	1次	S X 2	2.7+	0.4	0.4	正方形	本質遺存(2種類) 極用か
12	2-3	鉄	釘	1次	S X 2	3.1+	0.4	0.4	正方形	本質遺存(2種類) 極用か
13	2-2	鉄	釘	1次	S X 2	3.3+	0.4	0.4	正方形	本質遺存(2種類) 極用か
14	1-1	鉄	鍼	1次	S X 3	20.7+	3.4	0.5	長方形(茎)	先端欠損(当初から) 基底は鉤手状に屈曲 本質遺存
24	15-3	鉄	鍼?	2次	S X 12 ii	8.5+	2.6	0.5	長方形(茎)	茎部に人為的な切断か?
25	15-2	鉄	鍼	2次	S X 12 ii	19.8+	4.8	0.4	長方形(茎)	刃部と茎部に人為的な切断3ヶ所
28	15-1	鉄	包丁	2次	S X 13 ii	15.7+	3.5	0.4	長方形(茎)	刃部と茎部は人為的な切断による
29	12-1	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 13 bl	2.4	2.4	0.1	—	「古寛永」(1期)
30	12-2	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 13 bl	2.4	2.4	0.1	—	「古寛永」(1期)
31	12-3	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 13 bl	2.3	2.3	0.1	—	「新寛永」(3期)
32	12-4	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 13 bl	2.5	2.5	0.1	—	「新寛永」(3期)
33	12-5	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 13 bl	2.3	2.3	0.1	—	「新寛永」(3期)
34	12-6	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 13 bl	2.4	2.4	0.1	—	「新寛永」(3期)
35	12-8	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 15	2.4	2.4	0.1	—	「古寛永」(1期)
36	12-12	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 15	2.3	2.3	0.1	—	「古寛永」(1期)
37	12-10	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 15	2.3	2.3	0.1	—	「新寛永」(3期)
38	12-7	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 15	2.3	2.3	0.1	—	「新寛永」(3期)
39	12-11	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 15	2.4	2.4	0.1	—	「新寛永」(3期)
40	12-9	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 15	2.3	2.3	0.1	—	「新寛永」(3期)
41	15-4	鉄	鍼?	2次	S X 15	5.8+	1.4	0.3	—	刃部は人為的な切断か
49	15-5	鉄	釘	2次	S X 19	4.9	0.4	0.4	正方形	本質遺存(2種類) 極用か
63	12-14	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 27 bl~6	2.5	2.5	0.1	—	「新寛永(文鏡)」(2期)
64	12-15	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 27 bl~6	2.3	2.3	0.1	—	「新寛永」(3期)
65	12-16	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 27 bl~6	2.4	2.4	0.1	—	「新寛永」(3期)
66	12-13	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 27 bl~6	2.4	2.4	0.1	—	「新寛永」(3期)
67	12-18	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 27 bl~6	2.4	2.4	0.1	—	「新寛永」(3期)
68	12-17	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 27 bl~6	2.3	2.3	0.1	—	「新寛永」(3期)
77	14-1	鉄	釘	2次	S X 29	3.6	0.3	0.4	長方形	本質遺存
78	14-4	鉄	釘	2次	S X 29	2.4+	0.4	0.4	長方形	本質遺存(2種類) 極用か
79	14-8	鉄	釘	2次	S X 29	2.2+	0.4	0.3	長方形	本質遺存
80	14-3	鉄	釘	2次	S X 29	2.8+	0.4	0.3	長方形	本質遺存
81	14-7	鉄	釘	2次	S X 29	1.7+	0.4	0.4	長方形	本質遺存(2種類) 極用か
82	14-6	鉄	釘	2次	S X 29	1.7+	0.4	0.3	長方形	本質遺存
83	14-5	鉄	釘	2次	S X 29	2.2+	0.4	0.4	正方形	本質遺存
84	14-2	鉄	釘	2次	S X 29	2.5+	0.3	0.3	正方形	本質遺存
85	13-1	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 29 bl	2.5	2.5	0.1	—	「古寛永」(1期)
86	12-19	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 29 bl2	2.4	2.4	0.1	—	「古寛永」(1期)
87	12-20	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 29 bl2	2.3	2.3	0.1	—	「古寛永」(1期)
88	13-3	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 29 bl	2.4	2.4	0.1	—	「新寛永」(3期)
89	13-2	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 29 bl	2.3	2.3	0.1	—	「新寛永」(3期)
90	13-4	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 29 bl	2.8	2.8	0.2	—	「鉄一文鏡」
96	14-9	鉄	釘	2次	S X 32	1.6+	0.6	0.6	長方形	本質遺存
102	13-5	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 35 bl	2.4	2.4	0.1	—	「古寛永」(1期)
103	13-10	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 35 bl	2.5	2.5	0.1	—	「古寛永」(1期)
104	13-8	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 35 bl	2.5	2.5	0.1	—	「新寛永(文鏡)」(2期)
105	13-6	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 35 bl	2.5	2.5	0.1	—	「新寛永」(3期)
106	13-7	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 35 bl	2.4	2.4	0.1	—	「新寛永」(3期)
107	13-9	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 35 bl	2.3	2.3	0.1	—	「新寛永」(3期)
113	13-11	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 37 bl	2.4	2.4	0.1	—	「古寛永」(1期)
114	13-14	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 37 b4	2.4	2.4	0.1	—	「古寛永」(1期)
115	13-13	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 37 b3	2.5	2.5	0.1	—	「古寛永」(1期)
116	13-15	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 37 b5	2.5	2.5	0.1	—	「新寛永(文鏡)」(2期)
117	13-12	銅(鉄)	寛永通寶	2次	S X 37 b2	2.5	2.5	0.1	—	「新寛永(文鏡)」(2期)

## VI 調査のまとめと検討

今回の発掘調査は、県道改良工事内という限定された範囲内での発掘調査となった。そのため、円座近世墓群の全貌を知るには至らないが、近世墓33基、近世墓と考えられる土坑20基を確認した。また、少量ながら平安時代の遺物や、中世の遺構も確認することができた。

この調査で特筆できるのは、何といっても近世墓の具体的な状況が把握できたことである。これまで近世墓の状況は、三重県内ではほとんど把握されていないので、その意義は大きい。ここでは、今回の調査によって得た成果と、今後の課題などについてまとめておく。

### 1 近世以前の円座地区

今回の発掘調査では、少量ながら平安時代の遺物と中世の遺構・遺物を確認することができた。

#### a 平安時代の円座地区

平安時代の遺物は、近世墓の埋土中に混入していた数点の土器類である。平安時代中期、9世紀後半から10世紀頃のものである。

近世段階に円座地区外から遺物が混入した土砂を当地に搬入することは考えにくい。したがって、これららの遺物は円座地区に当該期の遺跡（集落跡）が存在することを示唆している。具体的には、塚の上遺跡が今回の発掘調査地点から西に約200m、中道遺跡が北に100mの地点にある。これらの遺跡が平安時代の集落跡である可能性は高いであろう。

#### b 中世の円座地区

中世の遺構として、溝S D 7がある。土坑SK 6も中世の遺構である可能性は高い。

溝S D 7は断面U字形の溝で、土地区画に関連した遺構と見られる。溝の延長線上西部には塚の上遺跡がある。塚の上遺跡は一部が発掘調査されており、鎌倉時代から室町時代にかけての遺跡であることが判明している<sup>(1)</sup>。塚の上遺跡から円座近世墓群までの間は埋蔵文化財包蔵地としては認識されていないが、この部分にも遺跡が広がっている可能性は高いであろう。

### 2 円座近世墓群の出土遺物

今回の発掘調査では、近世墓群の年代を直接示す遺物、例えば墓標や記年銘資料には恵まれていない。したがって、出土遺物から見た相対的な年代を見ていくこととなる。しかし、出土遺物は伝世の可能性が多分に含まれている。そこで、複数の出土遺物がある場合は可能な限り複数の観点から見ていく必要がある。

ここでは、土器類と金属製品類それぞれの見地から、当該近世墓の所属時期を検討する。

#### a 出土土器類の変遷

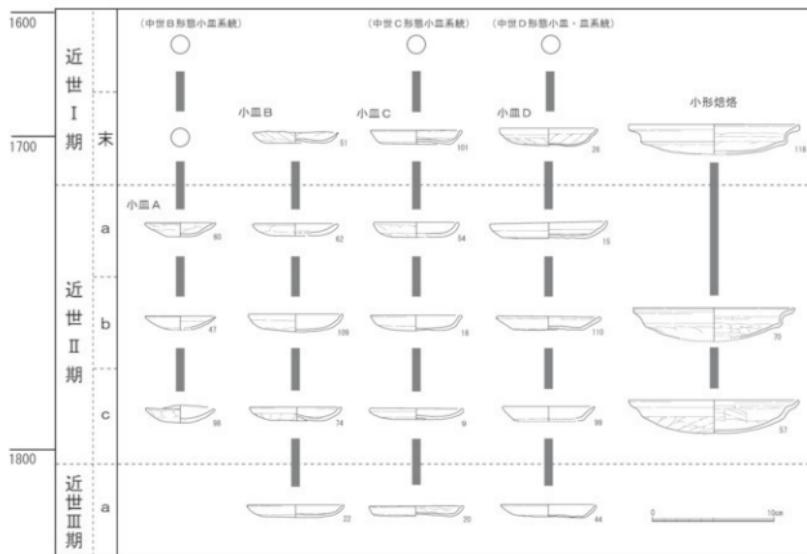
今回の調査で出土した土器類には、土師器・陶器・磁器がある。それぞれの状況を見よう。

**土師器** 円座近世墓群の土師器は中世南伊勢系土師器の系譜下にあるもので、南伊勢在地産である。基本的に手捏ね成形で、回転台（ロクロ）は用いていない。ここではこれを「近世南伊勢系土師器」としておく。円座近世墓群からは、小皿・皿のほか、小形の培塿が出土している。

皿・小皿は、南伊勢中世IV期<sup>(2)</sup>（15世紀後葉～16世紀末）からの変遷として把握できる。円座近世墓群の資料に基づき、近世I期から近世III期の3期に区分する。

近世I期は、中世以来の伝統を保持しつつ展開する段階と把握する。中世IV期の土師器皿類はA～Dの4形態を呈していたが、近世I期にはそれが概ね継続されていると見られる。円座近世墓群では、その末期頃の資料しかない。そのため、今後の資料増加を見て細分の可能性を考慮し、ここでは「I期末」として表現する。

I期末には、中世C・D形態の流れを汲むものが見られる。中世B形態は、当遺跡では未確認だが、他遺跡では見出される。小皿Cは中世C形態の伝統で、やや内擣する口縁部の内外面に弱いヨコナデが施されている。中世D形態の流れを汲む小皿Dは、口縁端部に強いヨコナデが施され、凹線状を呈している。



第14図 近世土器器皿類他の変遷（1：4）

近世II期は、中世後期からの伝統を一新し、新たな再編がなされる時期と認識する。近世I期まではヨコナデを施さない土器、施してもあまり画一的な形態をなさないものが見られたが、近世II期以降はヨコナデを多用するようになり、規格的な状況となる。近世I期まではオサエ・ナデ調整で留めていた小皿Bは、口縁部内外面にヨコナデを施すことにより、丸みを帯びた形態となる。小皿Cの系統は存在するが、数は少ない。小皿Dは、底部から明確な屈曲を持って開口口縁部に至る形態になる。内のヨコナデは、II a期では段を有する状況が比較的良好に確認できるが、II b期ではそれが不鮮明となり、II c期ではほとんど確認できなくなっている。なお、法量の異なる小皿Dがあり、これはII a期までは確認できるが、その後ははっきりしない。

近世III期は、全体に扁平・薄手で、ヨコナデが弱いものとなる。小皿B・C・Dが認識できるが、それぞれの区別はかなり分かりにくくなっている。

以上の変遷を、撤出する陶磁器類との併行関係で見ると、近世I期末は17世紀後葉～18世紀初頭、近

世II a期は18世紀前葉～中頃、近世II b期は18世紀中葉～後葉、近世II c期は18世紀後葉～19世紀初頭、近世III a期は19世紀前半頃、という時期区分ができると考えられる。

以上で見た近世の土器器皿類から、大まかな変遷を示したのが第14図である。

**陶器・磁器** 陶磁器類では碗が多い。陶器には瀬戸美濃産のものが見られる。出土量は少ないので、丸碗・「せんじ」などの茶碗系の器種が見られる。瀬戸美濃登録年 fifth 第9小期までのものが見られる。時期は、17世紀後半から19世紀前半頃にかけてである<sup>④</sup>。

磁器では肥前産のものが見られる。18世紀後半から19世紀初頭頃のものがある<sup>⑤</sup>。76のミニチュア碗は珍しい。

#### b 出土金属製品類から見た所属時期

金属製品類で時期比定に用いることができる材料に、錢貨（寛永通寶）と煙管がある。

**錢貨** 錢貨の出土した造構は6基で、いずれも六文銭（六道銭）と考えられるものである。鈴木公雄氏

による区分<sup>⑩</sup>では、Ⅲ期（1668～1697年）以降のものがS X37、Ⅳ期（1697～1739年）以降のものがS X13・15・27・29・35となる。このうち、鉄銭の存在からS X29は1739年以降となる。

六文銭は、埋葬時期の上限年代（初鑄年代より古くはならない）を知る有効な手段ではあるが、下限年代は知り得ない。

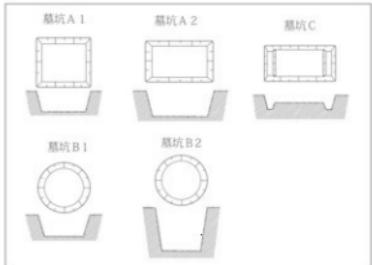
#### c 所属時期

以上のことから円座近世墓群は、早く見て17世紀末頃に開始され、19世紀前半頃にかけて造営されたと考えられる。この間およそ150年前後であろう。

### 3 円座近世墓群の構成

#### a 墓坑の形態

まずは墓坑形態を見る。墓坑は、隅丸方形を含めた平面方形のプランを墓坑A類、円形のものを墓坑B類、その他のものを墓坑C類とする。A類は8基、B類は22基、C類は1基で、円座近世墓群では圧倒的にB類が多い。



第15図 墓坑の形態分類

A類では、完全な正方形プランではなく、やや隅丸の長方形のものが多い（A1）が、短辺が長辺の半分ほどとなる事例もあり（A2）。埋棺方法の異なりが想定できるのかも知れない。

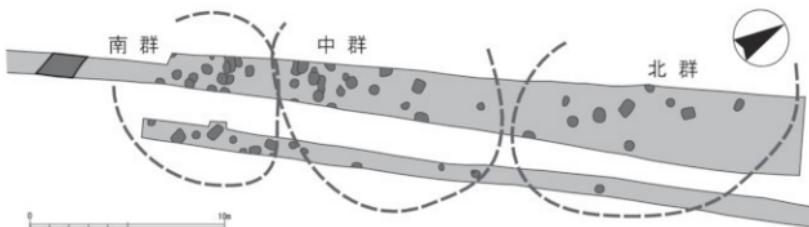
円形を呈するB類では、遺構検出面からの深さが20cm内外の極めて浅いもの（B1）が多いが、S X15・19・20のように検出面からの深さが50cmを越えるもの（B2）もある。遺構検出面と墓坑掘削当時の生活面との差については後に少し触れるが、この差も埋棺方法の違いが出ている可能性がある。

その他の形態としたC類では、墓坑の小口側が深くなる事例が確認できた。唯一の事例であるS X37は、検出面から棺底までの深さが10cmに満たないもので、全体形は削平されている可能性が高いものの、小口側のみ墓坑が深くなる特異な形態を呈する。古墳時代の木棺直葬の埋葬施設を彷彿とさせるが、具体的な意味内容は不明である。

#### b 時間的変遷

調査区内に見られる近世墓を、空閑地や密集の度合いから南群・中群・北群の3群に分けた（第16図）。なお、発掘調査範囲は当該近世墓群の一部であるため、この区分はあくまでも平面的な分布状況から見たものに過ぎない。また、南群と中群は接するような状態であるため、あまり厳密ではない。したがってこの検討も便宜的なものとならざるを得ないが、一定の方向性は見いたせる。それを基に、出土遺物の状況から墓坑の時期変遷を見たのが第17図である。

まず、それぞれの群単位で初現となるのは近世I



第16図 近世墓のグループ

	南群	中群	北群
1600			
1700	S X 3 S X 4 S X 1 S X 2 S X 12 S X 6 S X 19	S X 38 S X 27 S X 23 S X 21 S X 15 S X 3 S X 17 S X 11 S X 25 S X 24 S X 29 S X 30 S X 31 S X 32 S X 33	S X 35 S X 37 S X 36 S X 34
1800	a b c a		
近世Ⅲ期			

第17図 墓坑の変遷

期末（17世紀末～18世紀初頭頃）のものとなる。調査範囲内に限られるが、最初それぞれに1基程度であることは重要である。当該近世墓群が、集団墓地という形態を取りつつも、最初は散在する地点にバラバラと造墓されたことを物語っている。これらは、個別の家ごとの創始者的人物であったのではないかと思われる。

近世Ⅱ・Ⅲ期には、それぞれの群単位で2～4基ほどの造墓が確認できる。ひとつの小期がおよそ30年ほどと見れば、10数年で1基程度の増加が見られることになる。それぞれのまとまりを一家族と仮定した場合、複数世代ないしは複数世帯が関与していると見ることができる。

#### c 埋葬施設の性格

埋葬施設の性格とは、円座近世墓群が火葬墓なのか、あるいは土葬墓なのかということである。このことに関しては、墓坑が概して小規模なこと、遺構検出面からの深さが、削平を考慮するにしても概して浅いことなどが重要なポイントになる。

人骨に相当するものが出土した墓坑は少ない。具体的に入骨の一部が確認できたのはS X 1・2・12・32程度である。そして骨灰片と考えられるものが

S X 28・29・35で確認できている。

人骨の一部として確認できたのは、いずれも歯のエナメル質部分のみである。この状況から見て、土葬の可能性も考えたが、墓坑の大きさと深さから、火葬骨を入れたものと判断するのが適切であろうと考えられる。つまり、円座近世墓群は火葬骨を埋納した集団墓であろうと考えられる。

火葬骨の埋納方法に関しては、藏骨器が伴わないことから、有機質の容器、例えば桶、曲物、箱状のものに納められていたと考えられる。

#### d 副葬品の出土状況

円座近世墓群では、遺物の伴う墓坑がいくつか確認できた。埋葬に伴う副葬品と考えられる。副葬品には土器類（土師器・陶器・磁器）、金属製品類（鎌・包丁・刀子）のほか、六文銭（六道銭）も見られた。概略で見て、円形墓坑のものは墓坑中央に寄り、方形墓坑のものは墓坑端に寄る傾向が窺われる。墓坑床面に接して出土した遺物は六文銭以外はほとんど無く、多くが墓坑底から10数cm上で確認された。これは、棺内（火葬骨埋納容器内）に納められたのではなく、棺外に置かれたものが、棺の腐朽とともに下方へずり落ちたものが大半であることを示している。

六文銭に関しては、S X 35のみが墓坑底よりも10cm弱上方で確認されたが、多くは墓坑底に近い位置で出土した。これは、死者とともに棺内に据えられていたことを示していると考えられる。

#### e 墓坑の深度と削平状況

火葬骨埋納遺構と考えれば、遺構検出面から概して浅いことも納得できる。当地では、昭和57年度前後に県営圃場整備事業が実施されており、この段階にはすでに水田として利用されている。圃場整備直前の水田面標高は22.98～23.16mで、今回の調査直前の標高23.17mと比較しても大きく変わらない。明治中期頃に墓地が廃されて水田化した際に削平ないしは盛土がなされていると考えられるが、その場合にも大きな削平は考えにくい。

参考となるのが、調査区南部のSD 7付近に見られる盛土である。この部分には埋没した中世遺構を覆う盛土として20cmほどの層が見られる（第8図第2層）。仮にこの層が近世墓群付近から運ばれた土

砂だとすれば、近世墓群付近では20cmほどの削平がなされた可能性を考えることができよう。

円座近世墓群の上面は20cmほどの削平がなされていた、つまり、墓坑深度は今よりも20cm程度深いと考えると、今回の検出遺構深度が全体に20cm内外であるものも、本来は40cm内外のものであったこととなる。つまり、深さ20～30cm程度の有機質容器を埋納するにはちょうど良い深さということになると思われる。

また、現況検出面からの深さが50cmを越える遺構は、70～80cmほどの深さがあったことになる。深い遺構は多くはないが、これについては副葬品と呼べるものを持った遺構が少ないことが特徴として挙げられる。推測の域を出ないが、例えば嬰児・乳幼児などは深い穴を掘って埋葬したといった可能性が考えられるのではないかだろうか。

#### e 特徴的な出土遺物

**土師器類** 土師器皿類が比較的多く出土しているのも、円座近世墓群の特徴である。土師器皿類と近世墓の関係について、佐藤亜聖氏は民俗事例から「死者への供膳と死者と縁者の『食い別れ』」の儀式に使用されて<sup>(6)</sup>いるとしている。円座近世墓の事例もこれに該当するのであろうか。

特徴的な器種として、小形培塿がある。これほど小形の煮沸用上器は、中世以前には見られなかったものである。S X38出土の培塿(第13図118)は、内面に炭化物が付着しており、何らかの煮炊きをしていることは明らかである。葬送に伴う特注品として生産されたのであろうか。今後の資料増加を待ちたい。

**意図的に折られた利器** S X12から出土した鎌(第11図25)は、先端部を欠損しているのみならず、途中の3ヶ所に意図的な切断痕が見られた。また、S X13から出土した包丁も、先端部は人為的に切断されている。S X15から出土した鉄?の先端も、錯の状況から見てその類に相当すると考えられる。

墓と考えられる遺構から、意図的に曲げられた利器が出土した事例は、三重県内では上ノ庄北出遺跡(松阪市)で確認されている<sup>(7)</sup>。しかし、事例は少ない。

葬送儀礼の一環として、死者とともに利器(鎌や鉄・ナイフ)などを納める行為は、いくつかる民俗

事例で確認できる。しかし、その刃物を意図的に折るという行為はどのように評価できるのだろうか。

考えられるのは、「仮器化」行為の一種といふ意味である。古墳時代に一部を欠いた須恵器を副葬する事例があることはよく知られており、中世墓でも類似した行為は確認されている。これら時代の異なる墓に見られるものが同一原理に據るとは断定できないが、何か通底するものがあるのかも知れない。

ひとまずここでは事例の指摘に留め、資料増加を待って再考したいと思う。

## 4 円座近世墓群のその後

### a 明治絵図から

今回、「遺跡」として調査した円座近世墓群は、明治年間まで存在していた墓地である。明治19年1月28日の記録がある「伊勢国度会郡圓座村全図」(三重県所蔵、写真5)を見ると、当時の円座村には2ヶ所の墓地があった。ひとつは集落の南部で、



写真5 「伊勢国度会郡圓座村全図」部分(三重県蔵)  
➡の交点が円座近世墓群  
△の交点が現在の円座地区墓地



写真6 円座地区墓地無縁塔塚A



写真7 円座地区墓地無縁塔塚B

現在の円座地区墓地と同じ位置である。もうひとつの墓地とは、いうまでも無く今回発掘調査を実施した円座近世墓群そのものである。<sup>(8)</sup>

絵図の情報を頼りに考えると、円座近世墓群は明治19年までは確実に存在していたものの、その後廃され、おそらくは現在の円座地区墓地に統合されたものと考えられる。

#### b 無縁塔群の状況から

現在の円座地区墓地には、無縁塔がまとめられた塚（無縁塔ピラミッド）が2つ造られている（写真

6・7）。ひとつは現在の円座地区墓地にあったもの、もうひとつは円座近世墓群にあったものではないだろうか。

一方の無縁塔塚には慶長8（1603）年銘の板碑形五輪塔が、もう一方にも寛永年間頃の石塔が見られる。近世の円座村にあった墓地が慶長年間頃まで遡ることは確實で、遅く見ても寛永年間頃には成立しているものと考えられる。

円座近世墓群の発掘調査では、残念ながら17世紀前半にまで遡る資料には恵まれなかったものの、造墓の初現期は17世紀前半頃である可能性は高いといえよう。

以上、円座近世墓群の発掘調査から得られた情報をもとに、いくつかの検討を行ってきた。墓制を中心とした近世の埋蔵文化財に関するデータはまだまだ不足しているが、少しでも積み重ねることで、地域の豊かな歴史の一端に光を当てたいと思う。

#### 【註】

- (1)伊勢市円座町「塚の上A遺跡」(『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1983年)
- (2)伊藤裕作「南伊勢・志摩地域の中世土器」(『三重県史』資料編考古2、2008年)
- (3)藤澤良祐ほか「愛知県史」別編室業2、中世、近世瀬戸系(2007年)。
- (4)九州近世陶磁学会編「九州陶磁の編年」(2000年)
- (5)鈴木公雄「出土六道鏡の考古学的分析」(同氏著「出土鏡貨の研究」東京大学出版会、1999年)
- (6)佐藤亜聖ほか「結語」(『浄土近世墓地発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2006年) p.233右段。
- (7)三重県埋蔵文化財センター『上ノ庄北出遺跡発掘調査報告』(1998年)
- (8)なお、この絵図によると、円座近世墓群の位置は、明治19年には「中道」という字に含まれていたことがわかる。

第2次調査区全景（北から）



写真図版1

第1次調査区全景（南から）



写真図版2



調査区  
近景

第2次調査区近景（北から）



第2次調査区近景（北から）

個別遺構（1）

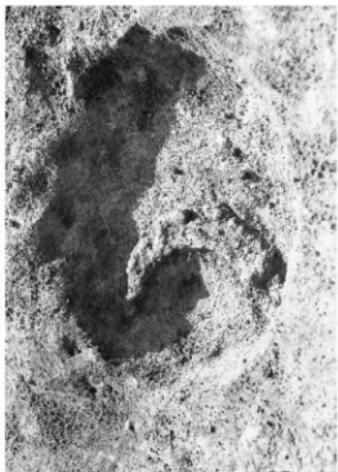
写真図版3



S X 4 (東から)



S X 12 (東から)



S X 3 (東から)



S X 11 (北から)

個別遺構（2）

写真図版4



S X 13 (北西から)



S X 21・22 (東から)



S X 11・12・13 (西から)



S X 16 (南東から)

個別遺構（3）

写真図版5



S X23 (東から)



S X27 錢貨・板材出土状況（東から）



S X24 (東から)



S X27 (北東から)

個別遺構（4）

写真図版6



S X 29 (北東から)



S X 33 (西から)



S X 28 (東から)



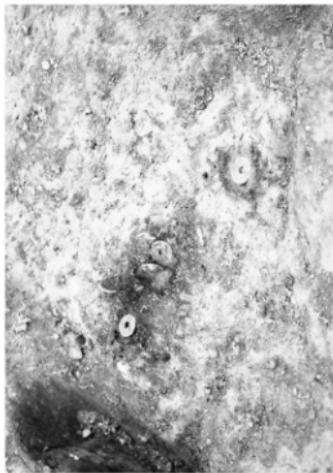
S X 32 (南から)

個別遺構 (5)

写真図版7



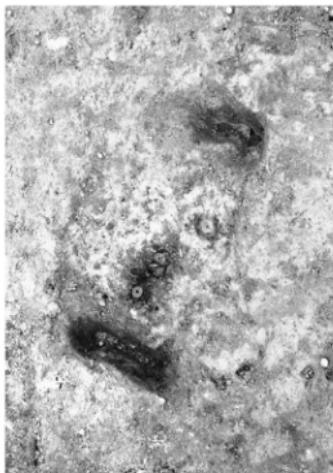
S X 35 (西から)



S X 37 銭寶出土状況 (西から)



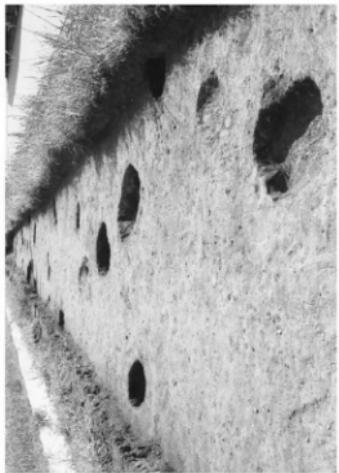
S X 34 (北から)



S X 37 (西から)

個別遺構（6）

写真図版8



第2次調査区近世墓北部（北から）



第2次調査区南部（南から）



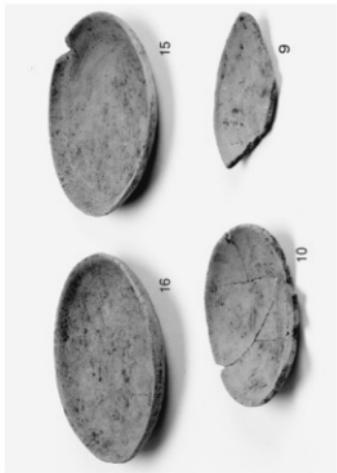
S X 36 (東から)



満 S D 7 (北東から)

出土遺物（1）

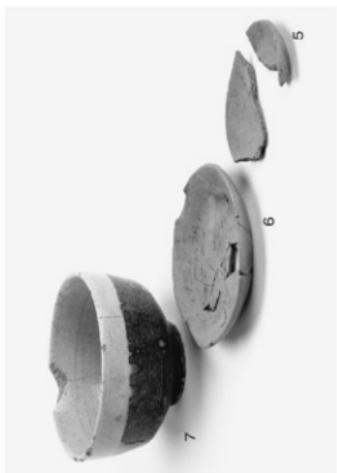
寫真図版9



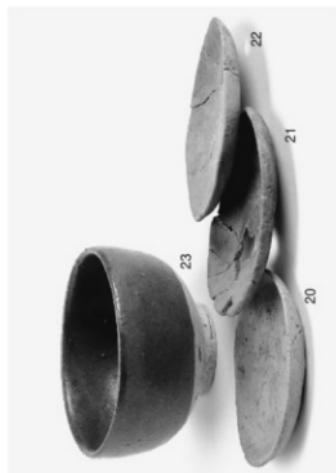
S X 2・4 出土土器類



S X 11 出土土器類



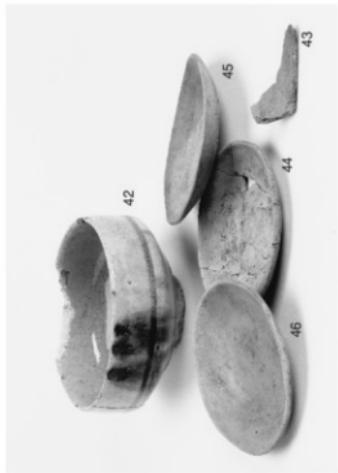
S X 1 出土土器類



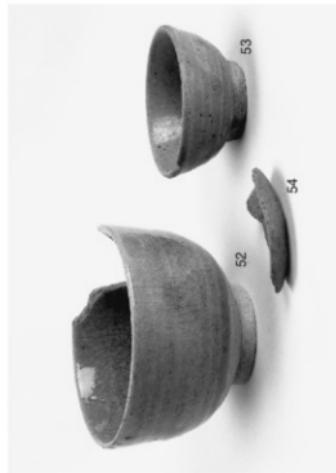
S X 12 出土土器類

出土遺物(2)

写真図版10



S X 16 出土土器類



S X 23 出土土器類

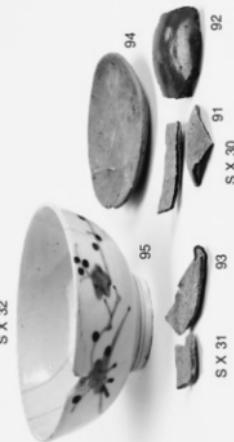


S X 13 出土土器類

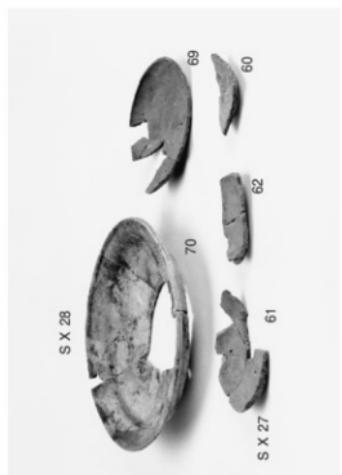


S X 17・19・21・22・26 出土土器類

S X 30・31・32 出土土器類



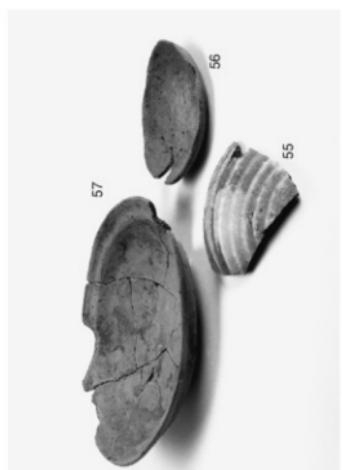
S X 27・28 出土土器類



S X 29 出土土器類



S X 24 出土土器類

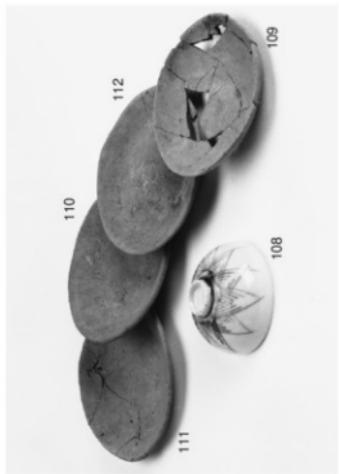


写真図版11

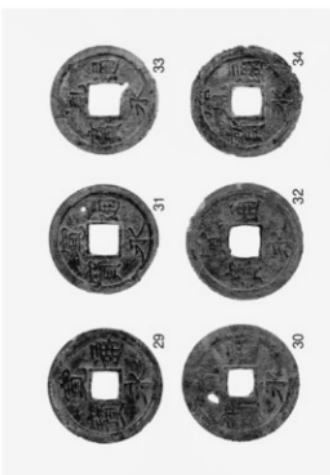
出土遺物(3)

出土遺物(4)

写真図版12



S X 36 出土土器類

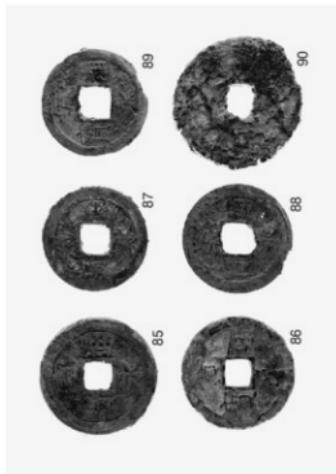


S X 13 出土錢貨

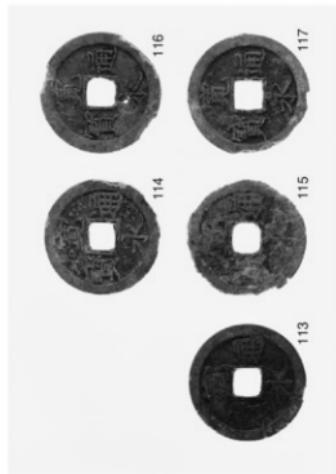


S X 33・34・35・38 出土土器類

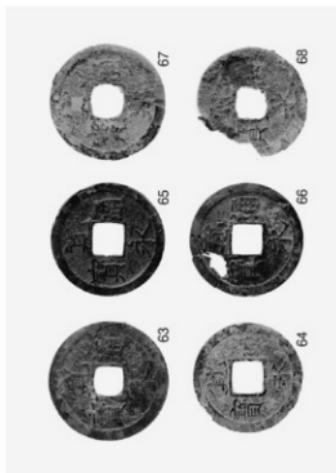
写真図版13



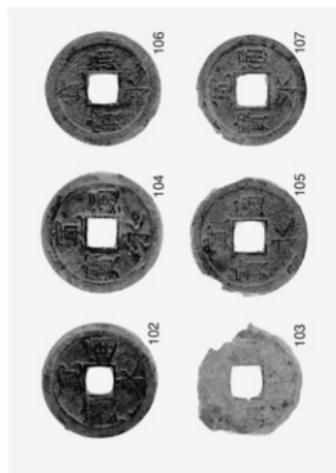
S X 29 出土錢貨



S X 37 出土錢貨



S X 27 出土錢貨



S X 35 出土錢貨

出土遺物(6)

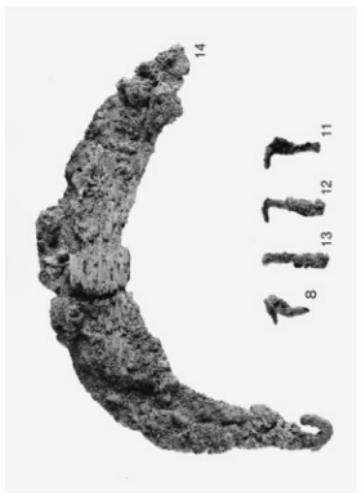
写真図版14



S X12 出土鐵製品



S X15 出土鐵製品



S X2・3 出土鐵製品



S X13 出土鐵製品

## 報告書抄録

ふりがな	えんざきんせいほぐんはつくつちょうさほうこく							
書名	円座近世墓群発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	344							
編著者名	伊藤裕偉							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	2014年2月28日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
円座近世墓群	伊勢市円座町 字壱通	24203	a344	34° 26' 36'	136° 39' 67'	20120220・ 21 20120806～ 09	36 126	主要地方道伊勢南島線(円座) 地方道路特定事業
所取遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
円座近世墓群 (第1次)	その他の墓	近世	近世墓	土師器・陶器・鉄製品				
円座近世墓群 (第2次)	その他の墓	中世 近世	溝・土坑 近世墓	土師器・陶器 土師器・陶器・磁器 鉄製品・六文銭ほか				
要約	円座近世墓群は、宮川中流南岸の台地上に立地する。県道改良事業に伴う発掘調査の結果、近世墓を33基、近世墓と考えられる土坑20基の、計53基に及ぶ墓坑群を確認した。墓坑は小規模で、火葬骨を埋納した墓坑と考えられる。17世紀末頃から19世紀前半にかけての墓で、三重県下では数少ない近世墓の発掘調査事例として注目できる。							

三重県埋蔵文化財調査報告 344

### 円座近世墓群発掘調査報告

2014(平成26)年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 文 化 印 刷



